

松阪城跡、久居城下町遺跡(第9次)・東鷹跡古墳発掘調査報告

2010（平成22）年9月

三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1. 本書は、三重県松阪市殿町にある松阪城跡の発掘調査、及び津市久居東鷹跡町にある久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳の発掘調査の報告書である。
2. 調査の原因是、松阪城跡は平成21年度の松阪工業高等学校部室等解体工事・渡り廊下改修工事・部室等建築工事、久居城下町遺跡（第9次）・東鷹跡古墳は平成21年度の久居農林高等学校農業土木棟渡り廊下設置工事である。なお、松阪城跡については、今回の調査に重要な参考となる平成15年に実施した自動車科実習棟建築工事に伴う工事立会結果も掲載している。調査にかかる費用は、三重県教育委員会が負担した。
3. 当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
【松阪城跡】調査研究I課　主査　山口田美、奥田勝久
【松阪城跡（平成15年工事立会）】企画調整グループ　主査　田中久生
【久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳】調査研究I課　主査　西村美幸、山口田美
発掘調査業務委託先
【松阪城跡】有限公司 アート（土工委託）
【久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳】久居農林高等学校の労務提供による
4. 調査期間及び調査面積は下記のとおりである。

【松阪城跡】平成21年7月2日～平成21年9月29日　527m²
【松阪城跡（平成15年工事立会）】平成15年12月19日～平成15年12月24日　150m²
【久居城下町遺跡（第8次調査）・東鷹跡古墳】平成21年5月20日～平成21年6月4日　24m²
5. 調査にあたっては、地元の方々、松阪市教育委員会、津市教育委員会、三重県教育委員会学校施設室、三重県県土整備部営繕室、松阪工業高等学校、久居農林高等学校からのご協力を得た。
6. 報告書の執筆は調査担当者が行い、文責は目次に示した。全体の編集は奥田が行なった。
7. 本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　例

<地図類>

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、工事図面、松阪市作成の1/2,500都市計画図、津市作成の1/2,500都市計画図である。
- 2 指図の方位は、世界測地系・測地成果2000による座標北で表している。なお、松阪市殿町付近の磁北は真北に対して $6^{\circ}50'$ 西偏し（平成15年国土地理院）、津市久居東鷹跡町付近の磁北は真北に対して $6^{\circ}50'$ 西偏している（平成15年国土地理院）。

<遺構類>

- 1 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（1999年版）を用いた。
- 2 本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。

S K：土坑 S D：溝 P i t · P：柱穴・小穴

<遺物類>

- 1 当報告での遺物実測図類は実物の1/4を基本としている。
- 2 遺物実測図は、各遺跡ごとの通番としている。
- 3 当報告書での用語は、「わん」は「椀」に統一している。

<写真図版>

- 1 遺物写真的番号は遺物図版の番号と対応している。
- 2 遺物写真是、縮尺不同である。

<参考文献>

- 遺物の時期については、主に下記の文献を参考とした。
- ・中野晴久『近世常滑焼における窯の縦年の研究ノート』『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ 常滑市教育委員会 1986
 - ・大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989
 - ・堀内秀樹『東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察』『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室 1997
 - ・東京大学遺跡調査室（編）『東京大学本郷構内の遺跡 医学部付属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 1990
 - ・大橋康二『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』理工学社 1994
 - ・藤澤良祐ほか『瀬戸市史』陶磁史篇4・6 瀬戸市 1993・1998
 - ・東京大学埋蔵文化財調査室（編）『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）』東京大学構内遺跡調査研究年報2別冊 1999
 - ・九州近世陶磁学会（編）『九州陶磁の縦年』2000
 - ・畠中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版 2003
 - ・（財）瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター（編）『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集 2006
 - ・山茶椀胎土分析プロジェクト「中世土器の生産と流通－胎土分析からみた山茶椀の生産と流通』『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994

目 次

I	前 言	・ ・ ・ ・ ・	(奥田勝久・西村美幸) · · 1
(1)	調査に至る経緯	・ ・ ・ ・ ・	1
(2)	文化財保護法にかかる諸通知	・ ・ ・ ・ ・	1
II	調査の方法	・ ・ ・ ・ ・	(奥田勝久・西村美幸) · · 2
(1)	調査の体制	・ ・ ・ ・ ・	2
(2)	調査区の設定	・ ・ ・ ・ ・	2
(3)	掘 前	・ ・ ・ ・ ・	2
(4)	記 錄	・ ・ ・ ・ ・	2
III	松阪城跡	・ ・ ・ ・ ・	3
1	位置と環境	・ ・ ・ ・ ・	(奥田勝久) · · 3
(1)	位 置	・ ・ ・ ・ ・	3
(2)	歴史的環境	・ ・ ・ ・ ・	3
2	遺 構	・ ・ ・ ・ ・	7
(1)	A 地区	・ ・ ・ ・ ・	(山口田美) · · 7
(2)	B 地区	・ ・ ・ ・ ・	(〃) · · 7
(3)	C 地区	・ ・ ・ ・ ・	(〃) · · 10
(4)	堀 跡	・ ・ ・ ・ ・	(〃) · · 10
(5)	D 地区	・ ・ ・ ・ ・	(田中久生) · · 10
3	遺 物	・ ・ ・ ・ ・	(奥田勝久) · · 14
(1)	SD108出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(2)	SK111出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(3)	SD112出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(4)	SD101出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(5)	SD107出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(6)	AA-9 Pit 1出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(7)	SK102出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	14
(8)	A地区包含層他出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	20
(9)	B地区包含層他出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	20
(10)	D地区包含層他出土遺物	・ ・ ・ ・ ・	20
4	自然科学分析	・ ・ ・ ・ ・	25
(1)	塗膜分析	・ ・ ・ ・ ・	(山田卓司〔(財)元興寺文化財研究所〕) · · 25
(2)	樹種同定	・ ・ ・ ・ ・	(木沢直子〔(財)元興寺文化財研究所〕) · · 27
5	結 語	・ ・ ・ ・ ・	(山口田美) · · 28
IV	久居城下町遺跡（第9次調査）・東薦跡古墳	・ ・ ・ ・ ・	(西村美幸) · · 29
1	遺跡範囲とこれまでの調査	・ ・ ・ ・ ・	29
(1)	遺跡名称と遺跡範囲	・ ・ ・ ・ ・	29
(2)	これまでの調査	・ ・ ・ ・ ・	29
2	調査の概要	・ ・ ・ ・ ・	31
(1)	遺構・遺物	・ ・ ・ ・ ・	31
(2)	まとめ	・ ・ ・ ・ ・	31

挿図目次

III 松阪城跡	
第1図 松阪城跡位置図	4
第2図 松阪城跡地形図	5
第3図 調査区位置図	6
第4図 A地区平面図	8
第5図 A地区土層断面図	8
第6図 B地区・C地区平面図	9
第7図 B地区土層断面図	11
第8図 B地区・C地区土層断面図	12
第9図 D地区土層断面図	13
第10図 D地区平面図	13
第11図 SK111、SD101・107・108・112、 AA-9Pit1 出土遺物実測図	15
第12図 SK102 出土遺物実測図	16
第13図 SK102 出土遺物実測図	17
第14図 SK102 出土遺物実測図	18
第15図 A地区包含層他出土遺物実測図	19
第16図 B地区・D地区出土遺物実測図	21
第17図 赤漆椀 (A) のXRF結果	25
第18図 赤漆椀 (B) のXRF結果	26
IV 久居城下町遺跡 (第9次調査)・東鷹跡古墳	
第19図 遺跡位置図	29
第20図 久居陣屋跡及び久居城下町遺跡 ・本発掘調査位置図	30
第21図 出土遺物実測図	31
第22図 土層断面図	31
第23図 遺構平面図	32

表目次

III 松阪城跡	
第1表 出土遺物観察表	22～24
第2表 分析対象資料および分析内容	25
第3表 赤色椀 (A) のXRF結果まとめ	25
第4表 赤色椀 (B) のXRF結果まとめ	26
IV 久居城下町遺跡 (第9次調査)・東鷹跡古墳	
第5表 久居陣屋跡及び久居城下町遺跡 ・本発掘調査一覧表	30
第6表 出土遺物観察表	31

写真目次

III 松阪城跡	
A 地区調査前風景	33
A 地区全景	33
B 地区調査前風景	34
B 地区全景	34
B 地区全景	35
C 地区全景	35
B 地区堀跡	36
SD112	36
SK111 遺物出土状況	37
SD112 遺物出土状況	37
土器・陶器・瓦	38
陶磁器	39～43
陶磁器・木製品・鉄製品	44
黒漆椀 (67) の漆膜採取箇所	45
黒漆椀 (67) の外表面の漆膜断面写真	45
黒漆椀 (67) の内表面の漆膜断面写真	45
赤漆椀 (A) の漆膜採取箇所	46
赤漆椀 (A) の外表面の漆膜断面写真	46
赤漆椀 (A) の内表面の漆膜断面写真	46
赤漆椀 (B) の漆膜採取箇所	47
赤漆椀 (B) の外表面の漆膜断面写真	47
赤漆椀 (B) の内表面の漆膜断面写真	47
木材組織顕微鏡写真	48
IV 久居城下町遺跡 (第9次調査)・東鷹跡古墳	
調査前状況	49
v - vi 断面	49
遺構掘削前全景	50
遺構掘削後全景	50

I 前 言

(1) 調査に至る経緯

A. 松阪城跡

松阪城跡（松阪市遺跡番号 a770）は、松阪市殿町に所在する遺跡である。平成 20 年度に三重県県土整備部公共事業運営室から松阪工業高校部室・渡り廊下建築改修計画の照会を受けた県埋蔵文化財センターでは、事業の実施には埋蔵文化財の保護措置が必要な旨を平成 21 年 2 月 13 日付けで公共事業運営室へ回答した。その後、県教育委員会学校施設室と当センターで建築計画等をもとに協議を行ったが、文化財への影響が免れない 527m²について発掘調査が必要となった。

この松阪城三之丸跡は、松阪工業高校の改修に伴い数回の調査が行われている。平成 7 年の五曲口跡の発掘調査では、城を巡っていた土塁の基底部と堀などが確認され、土塁が直角に方向を変えること等から五曲口門が近接することが推定された。平成 9 年には武道場の建築、平成 19 年にはテニスコートの改修及び廃液保管庫改築に伴う確認調査が行なわれた。いずれも遺構は確認されなかつたが、テニスコート改修に伴う確認調査では江戸時代の表土を確認している。また、平成 15 年の自動車科実習棟建築に伴う工事立合では、近世の溝、柱跡、整地などが検出され、参考として今回 D 地区として掲載した。

今回の調査区は前述した調査が行われている三之丸の南東部で、松阪城の外周に想定されている土塁や堀の検出が予想される場所でもある。

B. 久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳

久居城下町遺跡（津市遺跡番号 b 105）は、津市久居東鷹跡町に所在する遺跡である。

久居城下町遺跡は、昭和 55 年度以降、旧久居市や県埋蔵文化財センターによって範囲確認調査や本調査が行われ、地割りの溝などが確認されてきた（第 2 表参照）。平成 19 年度には、久居農林高等学校特別教室棟改築工事に伴い、736m²が調査され（第 8 次調査）、城下町の区割り溝と屋敷に伴う地下式土坑を確認し、多数の近世土器が出土した。この調査では、大型の後期古墳と考えられる周溝が確認され、

東鷹跡古墳（津市遺跡番号 b 232）として遺跡の登録を行った。^①

今回報告する第 9 次調査は、平成 19 年度に建設された特別教室棟と普通教室棟をつなぐ渡り廊下設置工事にともなうもので、第 8 次調査区の東側の調査成果である。

(2) 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

A. 松阪城跡

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第 48 条第 1 項（県教育長宛）

平成 21 年 5 月 12 日付け教委第 19 - 16 号

・文化財保護法第 99 条第 1 項（県教育長宛）

平成 21 年 7 月 3 日付け教理第 147 号

・遺失物法による文化財発見・認定通知

（松阪警察署長宛）

平成 22 年 1 月 29 日 教委第 12 - 4418 号

B. 久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第 48 条第 1 項（県教育長宛）

平成 21 年 5 月 14 日付け教委第 19 - 19 号

・文化財保護法第 99 条第 1 項（県教育長宛）

平成 21 年 6 月 2 日付け教理第 102 号

・遺失物法による文化財発見・認定通知

（津南警察署長宛）

平成 21 年 6 月 17 日付け教委第 12 - 4405 号

【註】

① 三重県埋蔵文化財センター『松阪城三の丸五曲口発掘調査報告』1996.3

② 三重県教育委員会『三重の近世城郭』1984 年 3 月 30 日

③ 平成 19 年度の調査時点では、遺跡の調査次数の整理がなされていなかった。今回の調査にあたり、津市教育委員会と協議をして番号を整理した。

④ 三重県埋蔵文化財センター『久居城下町遺跡・東鷹跡古墳』2008 年

II 調査の方法

(1) 調査の体制

三重県埋蔵文化財センターでは、発掘調査の土工部門（土木作業・安全管理、調査員・作業員誌などとの仮設、測量）などを民間業者に委託している。松阪城跡の発掘調査は、土工部門を株式会社アートに委託して発掘調査を行った。

一方、久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳の発掘調査では調査面積が狭小であったため、事業部局である久居農林高等学校から、労務・資材の提供を受ける形で発掘調査を行った。現地の管理は久居農林高等学校が委託した澤伊建設が行った。

(2) 調査区の設定

A. 松阪城跡

発掘調査箇所をA・B・C地区に分けた。渡り廊下建築予定地をA地区、部室A棟・B棟建築予定地をB地区、自転車置場・給排水設備設置予定地をC地区とし、平成15年の自動車科実習棟建築に伴う工事立合範囲を概述したようにD地区と設定した。

グリッドは、4m×4mの方眼を各地区毎に設定し、調査の基本単位とした。それぞれ調査区の方向に沿うが、近接するB地区とC地区は共通のグリッドとし、B地区的方向に合わせて設定している。

B. 久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳

調査箇所（調査区）内の任意の2点を率国部点を基準点とし、それにしたがって4m×4mの方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。今回の調査区は、狭小であったためグリッドは2つであり、西側を1A、東側を1Bとした。

(3) 掘削

表土掘削 表土は重機（バックホー）による表土除去を実施した。

遺構検出・遺構掘削 表土除去後、人力による遺物包含層掘削を実施し、その後、遺構検出・遺構掘削を行った。

(4) 記録

遺構番号 遺構番号付与は、小穴（pit、ピットとも表記）以外は遺構種別を超えた通し番号とし、小穴の番号については、グリッドごとに通し番号を付与した。

松阪城では、過去の調査との混同を避けるため101番からスタートしたが、D地区については既に与えられていた番号を踏襲している。

久居城下町遺跡では、第8次調査で遺構番号が20番まで付与されていたため、第9次調査では重複を避けるため、21番からスタートした。

遺構略図 遺構検出時等、遺構が確認された場合には、グリッド単位で1/40縮尺の「遺構カード」を作成した。ここには、埋土の状況・遺構の重複関係を記したほか、遺物取り上げにおける遺構番号の台帳としても使用した。また調査区内の遺構の分布などを把握するため、遺構カードを転写し、1/100縮尺の「遺構略図」を作成した。

遺構実測 調査区全体図及び調査区の土層断面図は1/20縮尺で、遺物の出土状況は1/10縮尺で手描実測を行ったが、久居城下町遺跡では、調査区全体図については平板を用い1/50縮尺で行った。

調査区平面図には国土座標（世界測地系）を表記し、過去の発掘調査地点との位置関係を把握できるようにした。

遺構写真 基本的に4×5インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルフィルムで撮影し、補助的に35mm判の白黒ネガおよびカラーリバーサルフィルムも使用した。また必要に応じてデジタルカメラでの写真も撮影した。

遺物実測 遺物実測は、出土遺物から必要なものを選び出し、1/1の実測を行った。

遺物写真 報告書掲載遺物を中心に必要なものを選択し、プロニー判白黒ネガフィルムで撮影したが、彩色のあるものについてはプロニー判カラー・ポジフィルムを用いた。

III 松阪城跡

1 位置と環境

(1) 位置

新しい松阪市は平成 17 年 1 月 1 日に旧松阪市・嬉野町・三雲町・飯高町・飯南町の 1 市 4 町が合併してできた。南北に細長い三重県のはば中央に位置し、三重県を横断する形で奈良県に達する。北は伊勢湾及び津市、南は多気郡多気町、東は多気郡明和町、西は奈良県に接している。

三重県の中部の地勢は、西に布引山地・高見山地・紀伊山地が南北に連なり、東は伊勢湾と伊勢平野が広がる西高東低の様相を呈している。松阪市は伊勢平野に位置し、三渡川、阪内川、金剛川によって形成された松阪低地と柳田川によって形成された柳田川周辺の 2 つの沖積平野がみられる。松阪城跡は松阪低地のはば中央部に位置し、阪内川右岸の標高 35 m の独立丘陵を中心とする平山城である。

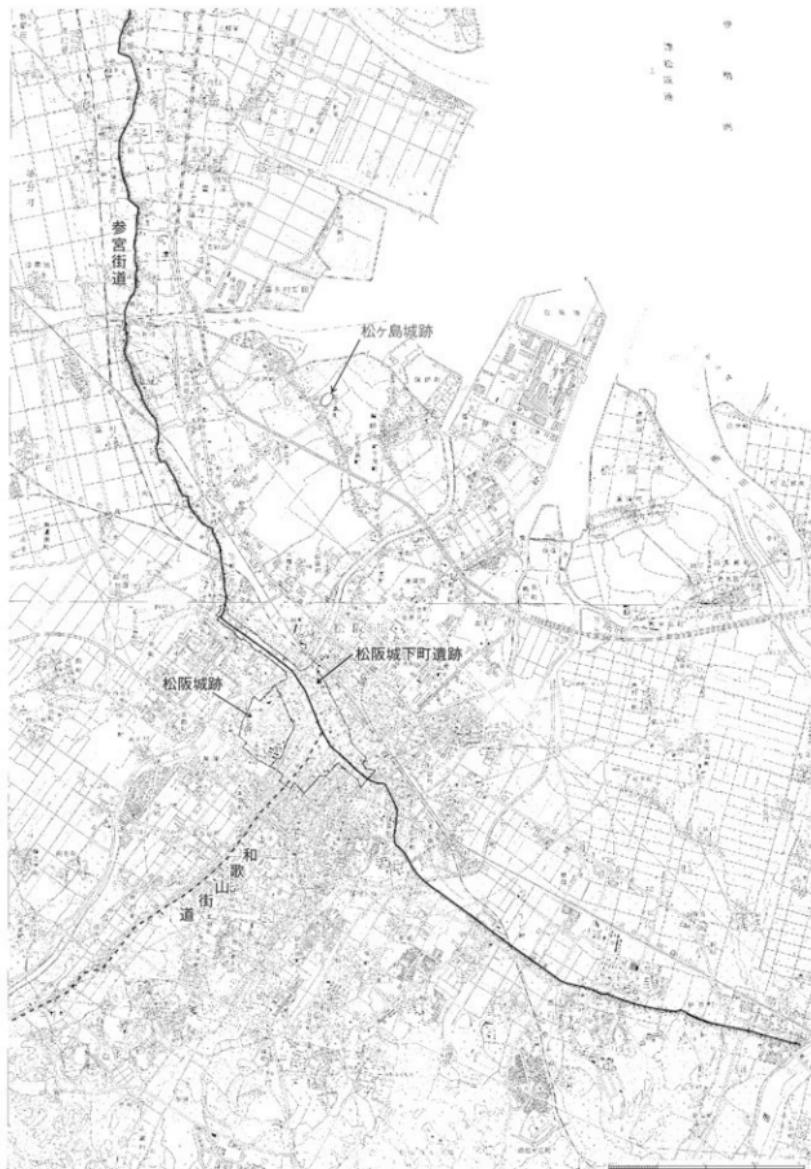
今回の調査区は松阪城跡の南端に位置する。江戸時代に作成された『伊勢国松坂古城之図』によると、今回の発掘調査の B 地区はかつて堀があったところにあたる。

(2) 歴史的環境

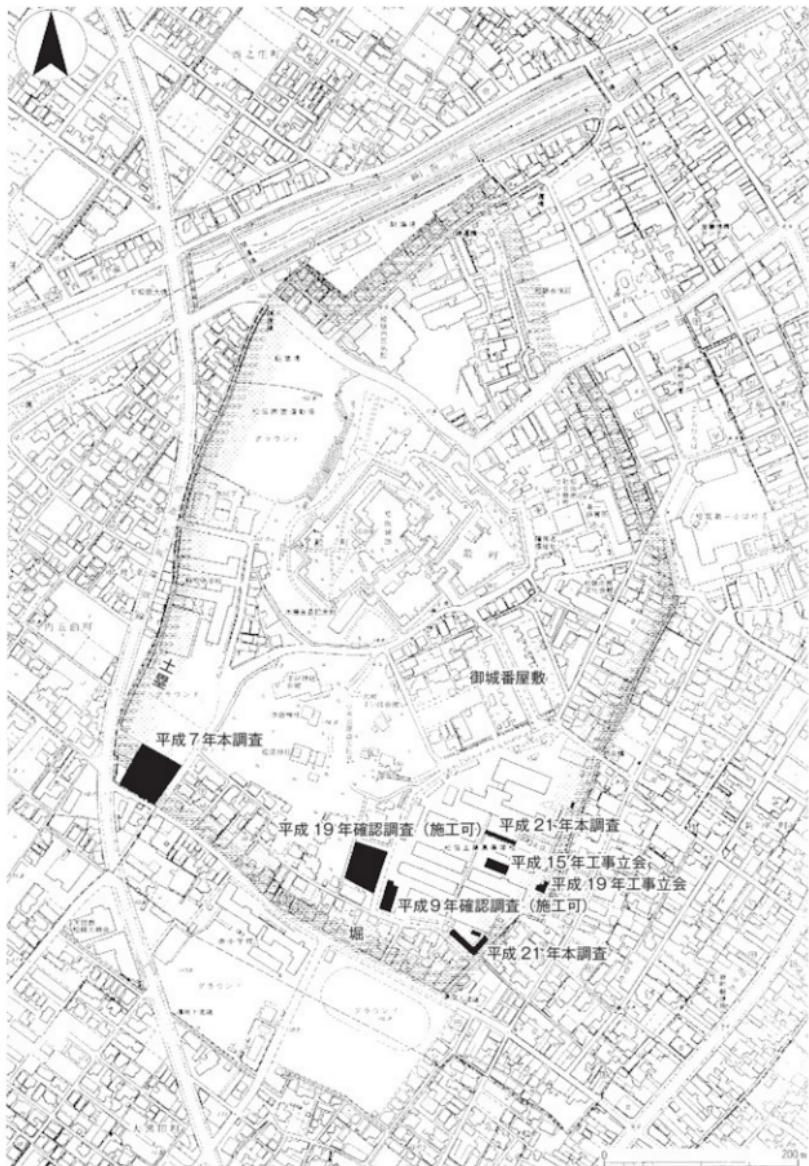
松阪は、南伊勢地方の軍事・交通上の要衝の地にあたり、柳田川の河谷を巡ると高見峠を経て吉野、和歌山に至り、海岸に出れば船便に恵まれる。したがって南北朝時代、この地には南朝方の有力拠点が築かれ、南北両勢力の戦闘がしばしば展開された。北畠氏の勢力下におかれた市内においても大河内城や阿坂城などの城が築かれている。永禄 12 年(1569)北畠氏の地位を織田氏が奪い、さらに本能寺の変後の天正 12(1584)年には織田信雄が秀吉により伊勢から追われ、松ヶ島城には蒲生氏郷が 12 万石の大名として近江国日野より入った。氏郷は入城後間もなく元亀元年(1570)に潮田長助が城砦を構えたという四五百森に築城を始め、天正 16 年(1588)には「松

阪城」と命名し、この新しい城に移った。西から北側を阪内川が流れ、この川を自然の要害として利用している。中核である本丸、八幡神を祀る二の丸、丘陵の裾一体を三の丸とし、周囲に土居と堀を巡らせた。築城とともに城下町の整備も行い、松ヶ島より百姓以外のものを強制的に移住させたり、近江国日野から商人を連れてきたり、伊勢の大湊から商人を呼び寄せたりしている。また、城下の発展のため、海岸沿いを通過していた参宮街道を町中へと引き込み、城下町の中央を貫通させ、それを中心に小路を縱横に配置した。後に松阪城が紀州領となってからは日野町を起点とする和歌山街道も整備された。天正 16 年(1588)に松ヶ島から松阪城下に移った町には、本町、大手町、工屋町、締屋町、博労町、中町、職人町、鍛冶町、白粉町、桜屋町、新町、桜屋町、大工町、魚町の 14 箇町あり、他から移住して開かれた町には日野町、濱町、平生町があった。その後、商工業を中心に町は発達し、町周りへ膨張して新たな町がいくつかでき、江戸時代中期には 42 町と 5 つの小路になっている。こうして松阪の商都としての発展の基礎をかためた氏郷であったが、城主としては 2 年と短く、天正 18(1590)年には小田原征討の軍功により 42 万石の太守として、奥州会津へと移っていた。

氏郷のあとには天正 19(1591)年服部一忠が 3 万 5000 石を領として、城主となるが関白秀次事件に連座して、改易となって自殺し、文禄 4(1595)年古田重勝が入封する。関ヶ原の戦いの際、重勝は関東から戻り、津城にも援軍を出し、自らは鍋島勝茂の率いる西軍と対峙して松阪城を守り抜いたと「藩翰譜」は伝える。この功により戦後 2 万石の加増を受け、重勝は 5 万 5000 石の大名となった。慶長 11(1606)年重勝は 47 歳で亡くなるが、嫡子重恒が幼少であったため、弟の重治が政務を執る。元和 5



第1図 松阪城跡位置図 (1:50,000) (国土地理院「松阪」「松阪港」1:25,000 より作成)



第2図 松阪城跡地形図（1:5,000）（堀・土壘の位置は「三重の近世城郭」三重県教育委員会 1984による）

(1619) 年大阪夏の陣の功により古田氏は石見国浜田へ移封となり、同年8月徳川頼宣が和歌山城主に命じられ、松阪もその治下に入る。以後明治に至るまで松阪城には紀州藩勢州領の統治の拠点として紀州藩の出先機関が置かれたのである。

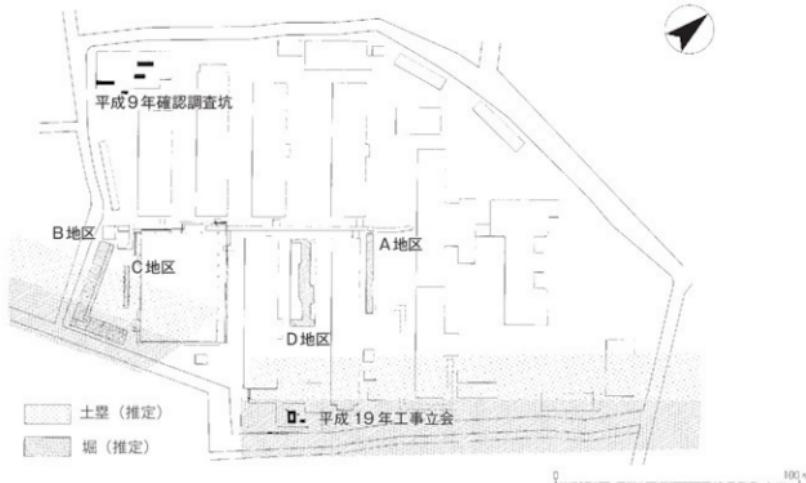
紀州領となってからは、松阪は商業の町として発展し、三井高利や小津清左衛門などの多くの豪商が生まれた。城の建物は明治元年までは多少残っていたが、明治政府の方針で、城内の建物などが売却されることになり、1881年に城跡公園（松阪公園）として一般に開放されるまで、城にあった建物はほとんどなくなってしまった。また、松阪城の土居と堀は明治10年代に民間に払い下げられ、耕作地として利用され、その後、徐々に宅地になり昔の面影はほとんど残っていない。現在、松阪城跡の遺跡として残されているものは御城番屋敷に土蔵が保存されている程度である。松阪城の旧三之丸搦手筋にある御城番屋敷は文久3(1863)年に建てられ、松阪城の建物で現在、唯一残っている建物であり、国の重要文化財に指定されている。

松阪工業高校は明治35(1902)年4月、松阪城三之丸跡に三重県立工業学校として開校した。三重県下で初めての工業学校であり、全国で初めて応用化学

科を設置した。当時、化学実験で用いる硫化水素によって壁が黒くなるのを防ぐため、壁を朱色（硫化水銀）で塗装したため、「赤壁」として開校当時から市民に親しまれてきた。現在は松阪工業高校資料館として利用され、松阪市の指定文化財になっている。昭和23(1948)年、戦後の学制改革で全日制課程に普通科が追加されたため、三重県松阪北高等学校と改称となったが、昭和27(1952)年、三重県松阪工業高等学校と改め、さらに昭和30(1955)年三重県立松阪工業高等学校と改称になり、現在に至っている。

【参考文献】

- ・ 松阪市『松阪市史』第1巻資料編 自然 1977.12.10
- ・ 三重県埋蔵文化財センター『松阪城三の丸五曲口発掘調査報告』1996.3
- ・ 下村登真男「松阪城」「三重県の城」㈱郷土出版社 1991.11.19
- ・ 松阪市『松阪城本丸跡上段発掘調査報告書』平成4年 3月
- ・ 平凡社『三重県の地名』日本歴史地名大系24 1983.5.20
- ・ 松阪工業高等学校ホームページ



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

2 遺構

今回の松阪城跡の発掘調査では、A地区、B地区、C地区の3箇所の調査を行い、それぞれの地区で溝と土坑を確認した。さらに、B地区、C地区では、松阪城の堀跡を確認することができた。各地区ともに廢城後も県立工業学校を中心とする土地利用が続けられていたためか、激しく搅乱され、検出面に至る層序は乱れた状態である。

なお、平成15年に工事立会を行ったD地区についても、検出面に至る層序は同様な状況であった。

(1) A地区

A地区は、東西に長く延びる狭い溝状の調査区のため遺構の性格を特定することは難しいが、溝5条と土坑4基を確認した。そのうち調査区東側で室町から近世・近代の陶磁器の出土が多く、SK 102・SD 107は松阪城に関係する可能性がある。調査区西側では古墳時代や鎌倉時代と思われる遺物が出土し、検出面（褐色粘質土）直上からは弥生時代後期から終末と考えられる高杯の脚部（75）も出土していることから、松阪城以前の集落が断続的に続いていたことが伺われる。

SK 102 調査区東側に位置する土坑である。北端は調査区壁際で確認できたが、南側は調査区外まで広がっていると思われる。調査時は土坑として扱ったが、南に延びる溝かもしれない。幅は2.3m、深さは検出面より0.1～0.5mである。遺構からは近世施釉陶器や染付椀、瓦、漆椀などが多量に出土しているが、出土状況から埋納されたものではなく投棄されたものと考えられる。これらの時期から近世末頃の土坑と思われ、松阪城に伴う遺構である。

SK 103 調査区中央付近で確認した。南端は調査区外のため形態は不明確であるが、幅は0.4m、検出面からの深さは0.01mで須恵器・土師器小片が出土し、古墳時代の土坑と思われるが確認はない。

SK 104 調査区中央付近で確認した。北端は方形を呈するが南端が調査区外のため形態は不明である。幅は0.3m、検出面からの深さは0.07mである。土師器片が出土しているが、時期は不明である。

SK 109 調査区の東端に位置し、搅乱溝と思われる。出土遺物はなかった。

SD 101 調査区の西側に位置し、幅は0.8m、深さは検出面より0.3m前後で、調査区を横切るよう南北に延びる溝である。埋土は灰褐色粘質土と黒褐色粘質土で、山茶椀底部（3・4）が出土し、鎌倉時代の溝と考えられる。

SD 105 調査区中央付近に位置し、幅は0.15m、深さは検出面より0.05mの細く浅い溝である。南側は調査区外に延び、北側は調査区中央付近で終わる。埋土は黒褐色土で古墳時代の須恵器小片と時期は不明だが土師器片が出土し、古墳時代後半の溝の可能性がある。

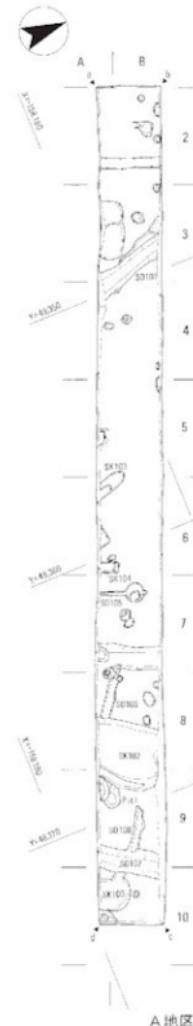
SD 106 東西に延びる溝であるが東側はSK 102に切られている。幅は0.4m、深さは検出面より0.05m前後である。埋土は灰黄褐色土で須恵器小片が出土しているが、時期は不明である。

SD 107 調査区の東端付近に位置し、幅は0.7m、深さは検出面より0.4m前後で調査区を横切るよう南北に延びる溝である。埋土は灰黄褐色粗砂と褐灰色粘質土で、擂鉢（18）や天目茶椀（17）が出土しており、この遺構は松阪城に伴うものと考えられる。

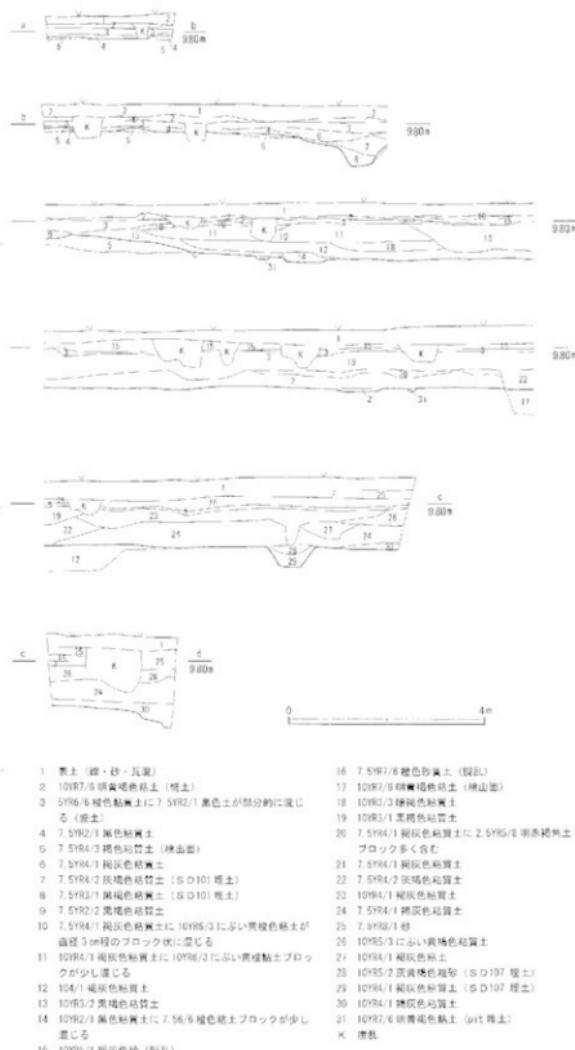
SD 108 SD 107の西側に直交する溝で、東端はSD 107に切られている。弯曲して東側の調査区外まで続くかもしれないが、SK 109の搅乱により残存していない。幅は0.4m、深さは検出面より0.04mの溝である。遺構埋土から古墳時代の土器（1・2）が出土し、古墳時代後半の溝と考える。

(2) B地区

B地区はL字型の調査区で、調査区北西端より約16mで堀脛を確認した。調査区北西端では、溝2条、土坑1基を確認した。これらの遺構からは、須恵器・土師器片や山茶椀、土師器鍋などが出土しており、古墳終末や中世の集落があったことが伺われる。これらの遺構群を検出した面は、堀に向かって徐々に傾斜し、調査区西端から6mほどで急激に落ち込ん



第4図 A地区平面図 (1:200)



第5図 A地区土層断面図 (1:100)



第6図 B地区・C地区平面図 (1:200)

でいる。これにより前述した遺構群は消滅しているが、本来は東側へ広がっていたものと考えられる。

SK111 調査区の北西壁際で確認した。多くが調査区外のため形態は不明確である。南西端はSD112と重複するが、前後関係は不明である。検出面からの深さは0.1m前後である。埋土から土師器片、山茶椀(9)、土師器皿(5)、ロクロ土師器(8)、土師器鍋(7)が出土し、SD112と同様の平安時代末頃の土坑と考えられる。7は横倒して検出され、一見、完形を思わせる出土状況(第6図・P37写真)であるが、2/3ちかくを欠損しており、埋納等は考えられない。

SD110 調査区の北西側に位置し、幅は0.3m、深さは検出面より0.2m前後である。調査区を横切るように南北に延びる細く浅い溝だが、東西に延びるSD112と直交している。須恵器片、山茶椀小片に混じり近世陶器が出土しているが、近世陶器は接する擾乱溝からの混入の可能性があり、この溝はSD112と同様な時期と推測される。

SD112 調査区の北西壁から北東壁に向けて検出した溝である。両端とも調査区外まで続くと考えられるが、北西端は擾乱により不明である。幅は15m、深さは検出面より0.1~0.3m、延長は15m以上になる可能性がある。埋土から須恵器・土師器片、山茶椀(13・14)、白磁碗(16)、土師器鍋(12)、ロクロ土師器(10・11)などが出土し、平安時代末頃の溝と考えられる。12は溝の北岸ちかくで合口棺を思わせる状況(第6図・P37写真)で出土した。横倒し状態で、上半1/2を削平により欠損したかのようである。この鍋を埋めた掘形は確認できず、溝の埋土内と考えられる状況である。両者を取り上げたところ、両者は酷似し、同一個体の可能性が高いものである。一応、同一個体として12のみを図化し、合口棺の可能性を否定したが、どのような原因でこのように埋没したのか疑問が残る。

当初、SD112に重複するかたちでSD113を検出したが、掘削の過程で同一であることが判明し、SD112で統一した。

(3) C地区

C地区はB地区的北東側に位置する。C地区的西端から13mあたりで堀肩を確認することができ、それより東側は堀跡と考えられる。また、B地区的堀肩の延長線上にC地区的堀肩が位置しており、堀跡がB地区より北東に延びていることが解る。堀肩より西側に溝7条(SD115~117・119・127~129)と土坑9基(SK114・118・120~126)、ピット数基を確認した。SK126で古墳時代と思われる須恵器・土師器の小片が出土し、2基のピットから平安後期以降と思われる土師器やロクロ土師器が各1点、その他時期不明の土師器片が少し出土した遺構があるものの、ほとんどの遺構からは遺物は出土しなかった。

(4) 堀跡

B地区・C地区で堀跡を確認した。B地区的E6~E7付近で3m×4mのトレンチを掘り下げたところ堀肩検出面より1.6mあたりで灰色の砂層を確認した。それ以下では赤褐色土や褐色土が確認できたが、湧水が激しく、さらに掘り下げることはできなかった。堀に流水があったとすれば灰色砂層が堀底に堆積した砂層とすることもできるが、混入物が確認できないことから、灰色砂層上面を堀の底と考ええる。

今回、堀の肩を確認した地点から10mほど手前で検出面は急激に落ち込んでいる。この落ち込みは検出面と同色の黄褐色土で覆われているが、地山に比べ柔らかい土で人為的に埋められ整地された様子が伺える(第6図・トーン部分)。整地の厚さは1mまで確認できたが、おそらく堀底と同じ高さまで到達するものと推測される。整地内の遺物は確認できず、整地の時期については不明とせざるを得ないが、堀を作る前になんらかの落ち込みがあり、それを整地して堀を作ったのではないかと考えられる。

(5) D地区

自動車科実習棟建設に伴い工事立会を実施した地区である。この付近は江戸中期の絵図によると牢屋が描かれている。

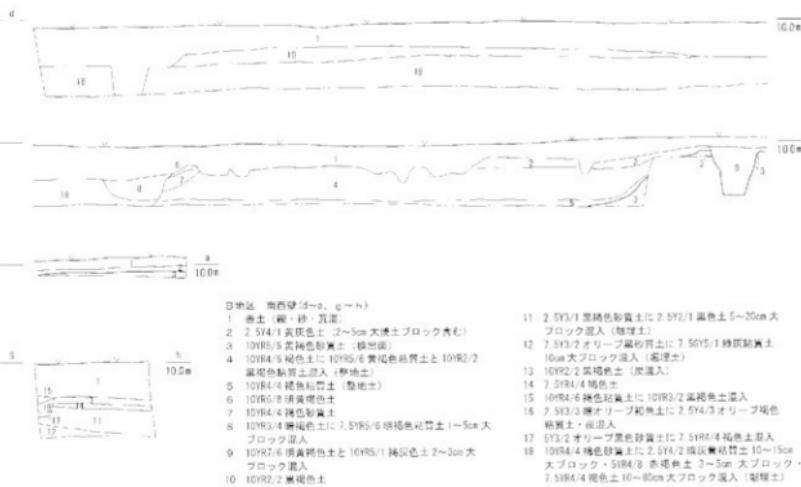
工事立会の結果、遺構・遺物が認められたので、



第7図 B地区土壌断面図 (1:100)

B地区

南西壁 (d ~ a、g ~ h)

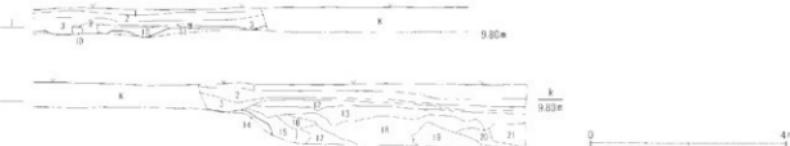


C地区

西壁 (i ~ j)



北壁 (j ~ k)



C地区 西壁 (i ~ j)・北壁 (j ~ k)

- 1 表土
- 2 2.5Y4/1 黄灰色土
- 3 7.5Y5/4 黄褐色粘質土に 7.5YR2/2 黄褐色土 3~5cm 大 ブロック混入
- 4 5YR3/5 黄褐色粘質土
- 5 10YR3/4 黄褐色土
- 6 10YR4/6 黄褐色土
- 7 7.5YR4/4 黄褐色土
- 8 10YR2/3 黄褐色土に 7.5YR5/6 黄褐色土 2~10cm 大 ブロック混入
- 9 10YR3/2 黄褐色土に 7.5YR5/6 黄褐色土 0~1~2cm 細混入
- 10 7.5YR5/3 黄褐色土に 7.5YR5/6 黄褐色土 0~1~2cm 細混入
- 11 7.5YR4/6 黄褐色土に 7.5YR3/4 黄褐色土混入 (裸出面)
- 12 10YR5/6 黄褐色粘質土 (小石含む)
- 13 5YR4/3 嫌オーラープ粘質土 (~5cm 小石含む)
- 14 2.5Y4/6 オリーブ褐色粘質土
- 15 2.5Y5/4 黄褐色砂質土
- 16 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土
- 17 10YR5/5 黄褐色粘質土
- 18 2.5Y2/3 オリーブ褐色粘質土 (~5cm 小石含む)
- 19 2.5Y2/1 黄褐色粘質土
- 20 10YR5/3 に少い黄褐色粘質土
- 21 2.5Y5/3 黄褐色粘質土
- 22 堆もどし土
- K 頂面

第8図 B地区・C地区土層断面図(1:100)

埋蔵文化財に影響のある範囲について、簡易的な調査を実施した。調査区は幅2mの横に長いU状のトレンチである。基本層序は工事により不明確な部分も多いが、校内に敷かれた碎石の下には整地層があり、地表から70cm程度で褐色粘土質に至る。遺構検出はこの層の上面で行った。碎石から検出面に至る整地層は一時期のものではなく、前身校舎の建築時をはじめとする頻繁な土地利用の変更により、整地を繰返しているものと思われる。最も古い整地が松阪城に伴う可能性もあるが、断定できなかった。検出面とした褐色粘土層は東へ向かって緩やかに傾斜するが、調査区の中央部で40cmほど急に低下する。それに対応し整地も厚くなるが、これ以東の整地は新しいもので、松阪城に伴う可能性はない。

調査の結果、多数の土坑や溝を検出したが、遺物の出土したものは少なく、時期・性格ともに明確なものは少ない。

S D 1 調査区西部で検出した東西に延びる溝である。幅約2.4m、検出面からの深さ20cm程度で、近世の陶器（114・116・119）が出土しており、松阪城に伴うものと考えられる。

S D 2 調査区中央部で検出した東西に延びる溝である。幅1m、検出面からの深さは70cmと推定される。遺物の出土ではなく時期は不明であるが、延びる方向からA地区のS D 107に繋がる可能性があり、その場合、松阪城に関係する遺構となる。



1. T字溝（褐色粘土・泥炭質）
2. 土坑（褐色粘土・泥炭質）
3. SD12 植物付褐色粘土上に砂利（灰入・泥炭質）
4. SD12 褐色粘土・整地層
5. 119(3) 黒褐陶土（表面微細な縦溝入・植物付）
6. 116(3) 黑褐陶土（表面微細な縦溝入・植物付）
7. 114(3) 黑褐陶土（表面微細な縦溝入・植物付）
8. SD12 黒褐陶土上に砂利（灰入・整地層）
9. SD12 黒褐色粘土（深めの灰柱入・遺構付）
10. SD12 黒褐色粘土上に砂利（灰柱入・整地層）
11. SD12 黒褐色粘土（砂利柱入・整地層）
12. SD12 黑褐色粘土・整地層
13. SD12 黑褐色粘土上に褐色粘土多く混じる（整地層）
14. SD12 黒褐色粘土（褐色粘土多く混じる）
15. SD12 黒褐色粘土（褐色粘土多く混じる）
16. SD12 黒褐色粘土（褐色粘土多く混じる）
17. SD12 黒褐色粘土（褐色粘土多く混じる）

第9図 D地区土壌断面図 (1:100)



第10図 D地区平面図 (1:200)

3 遺物

出土遺物の大半は江戸時代後半でも末期にちかい時期の陶磁器類であり、近代に下るものも多くある。古墳時代後半や平安時代末から鎌倉時代のものも散見され、最も古いものは弥生時代後期に遡る。しかし、搅乱坑等との重複も多く、一括性に欠けるものがほとんどである。

(1) SD108出土遺物（第11図）

1は土師器の甕、2は須恵器の杯である。1はS字状の口縁部をもつものと思われ、2の口縁部は低く内頃している。

(2) SK111出土遺物（第11図）

5・6は土師器の皿としたが、6は小片のため確証はない。7は土師器の鍋、8はロクロ土師器の皿、9は山茶碗で比較的薄い器壁で口縁端部が外反し、内面には墨が付着する。これらは平安時代末期のものと考えられる。

(3) SD112出土遺物（第11図）

10・11はロクロ土師器の皿、12は土師器の鍋、13・14は山茶碗、15は陶器の甕、16は白磁碗である。13は薄い器壁で口縁端部が外反するが、14の器壁は厚い。しかし14の高台は断面方形のしっかりしたもので、大きく時期が下るものではない。したがって、これらは平安時代末頃のものと考えられる。

なお、14の底部外面には墨書があり、「〇」と記されている。何らかの記号であるものと考えられる。

(4) SD101出土遺物（第11図）

3・4ともに山茶碗である。両者とも低く退化した高台を難に貼り付け、鎌倉時代に下るものと考えられる。

(5) SD107出土遺物（第11図）

17は天目茶碗、18は陶器の擂鉢である。17は鉄釉、18は銘釉が施され、両者とも瀬戸美濃であるが、鐵豊期にさかのほるものと考えられる。

(6) AA-9 Pit 1出土遺物（第11図）

図示できたものは全て近世の陶磁器で、18～19世紀のものである。

20は施釉陶器の腰錫茶碗、24は行平鍋で、図示していないが、片口が付くものと思われる。

19・21～23は磁器の染付で、23は皿、他は碗である。23は墨書き技法を採用した山水画を内面に、外面には唐草文を施す。高台は蛇目凹型高台を呈し墨書きが施されるが判読できない。小片のため明確ではないが、19・21・22の外面には草花文が染付され、さらに見込には、22に菊花文、21にはその変形と思われる文様が施されている。21は瀬戸美濃、他は肥前と思われる。

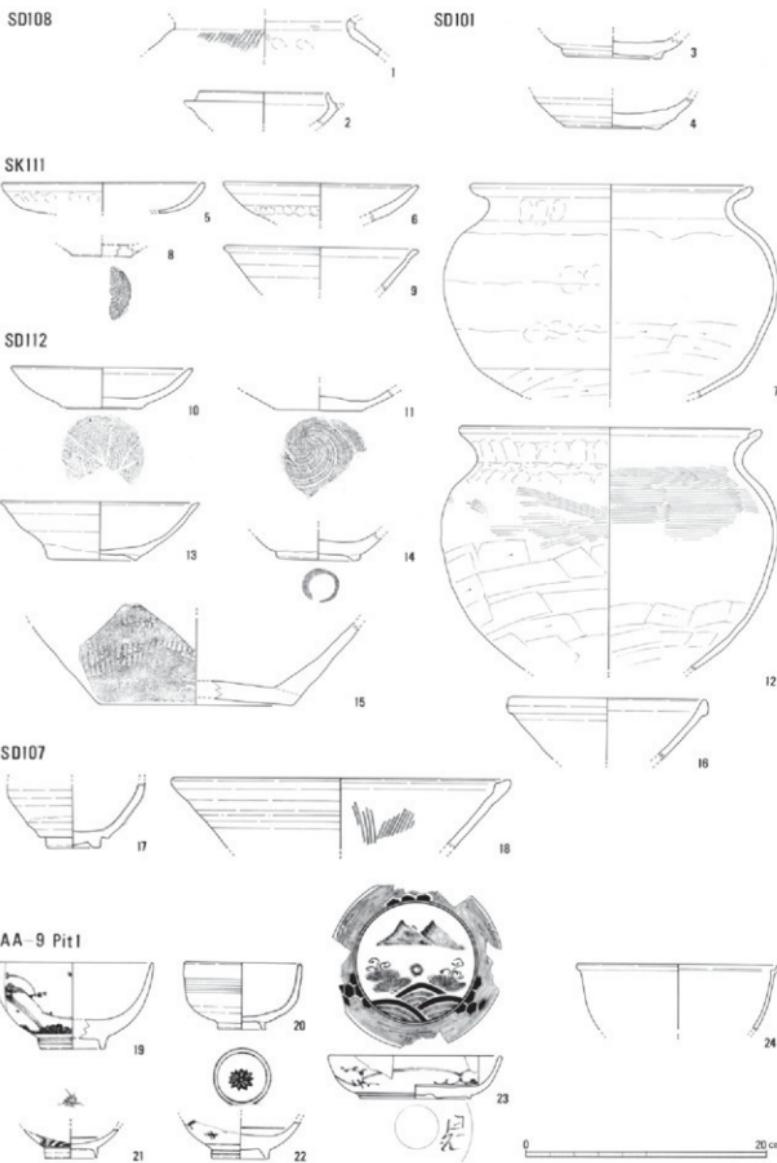
(7) SK102出土遺物（第12～14図）

近世の陶磁器を中心とする多量の遺物が出土している。陶器の甕や擂鉢に18世紀前半に遡るものみられるが、他の陶磁器については18世紀後半から19世紀にかけてのものである。

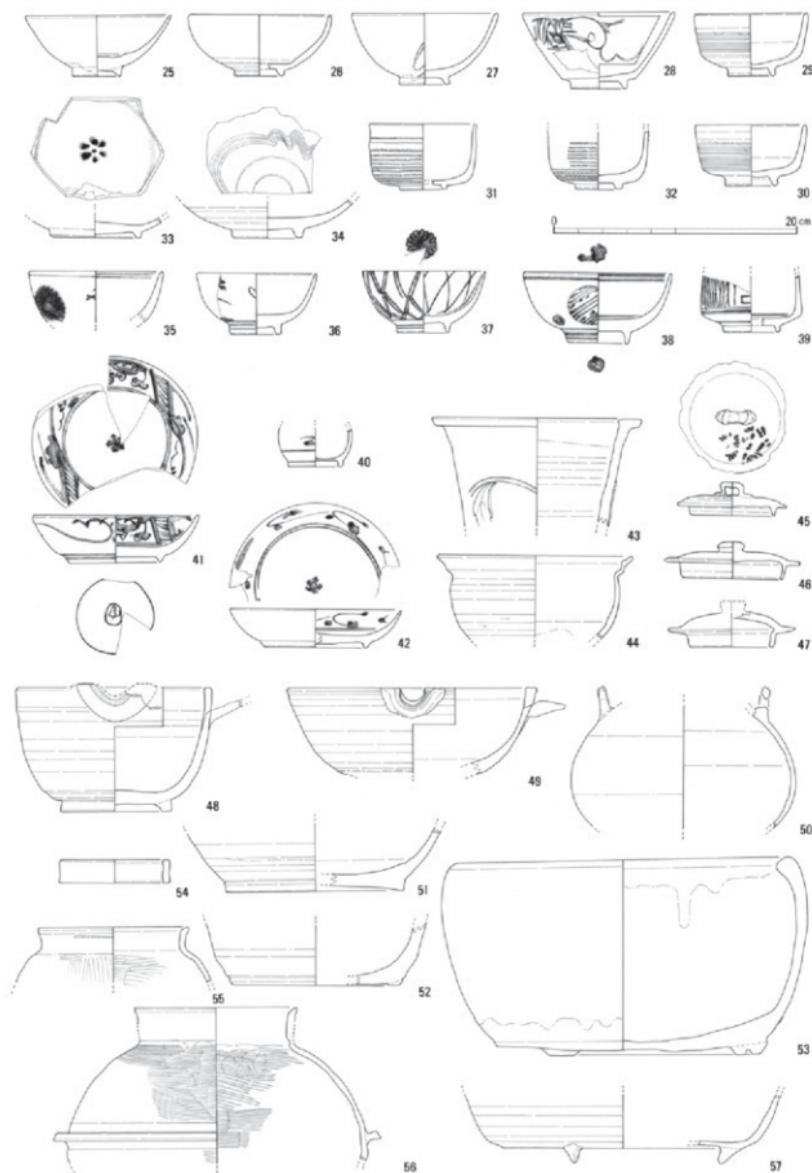
54～56は土師器で、55・56は茶釜である。54は輪台状の形態を呈し、一応、托としたが、受部は顕著でなく別の用途も考えられる。胎土は精良で橙色を発色する精製品の要素もあるが、整形は歪みを残す状態である。

25～34は施釉陶器の碗皿類で25～32は碗、33・34は底部片のため器種が明確でないが、33は皿、34は鉢とした。特に29・30は腰錫茶碗、31・32は鉢茶碗と称されるものである。前者は大部外面下半にカキメを施し、装飾風に仕上げている。後者も同様な範囲に小さい刺突列点や波状文を施している。27・28には蔓草状の絵柄を施す。33は陶胎染付で見込には梅花文が施される。25・34の見込は蛇目釉禿となり、34は釉禿部分を朱色とし、その外周に波状文を施す。34は肥前、他は瀬戸美濃と思われるが、25・26・28は不明としておく。

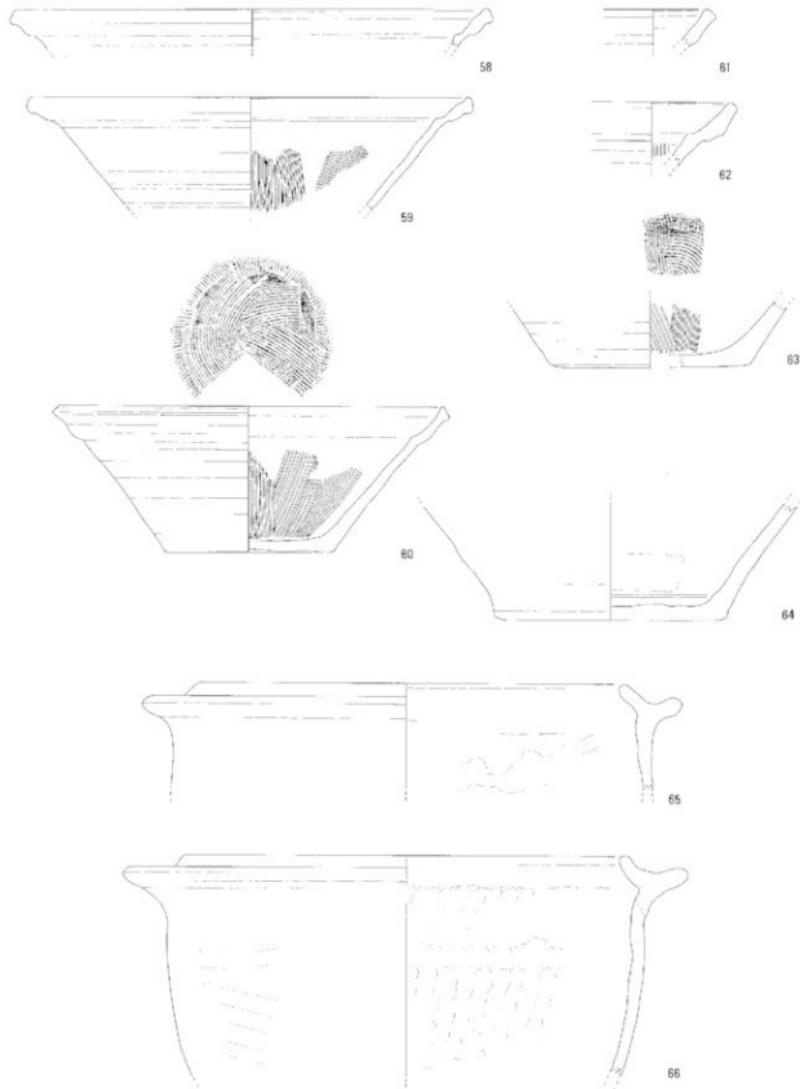
35～42は磁器の碗皿類で全て肥前の染付である。35～39は碗で39は筒型碗と称されるものである。37の見込には菊花文、内外面に網状の文様を染付



第11図 SK 111、SD 101・107・108・112、AA-9 Pit 1出土遺物実測図 (1:4)

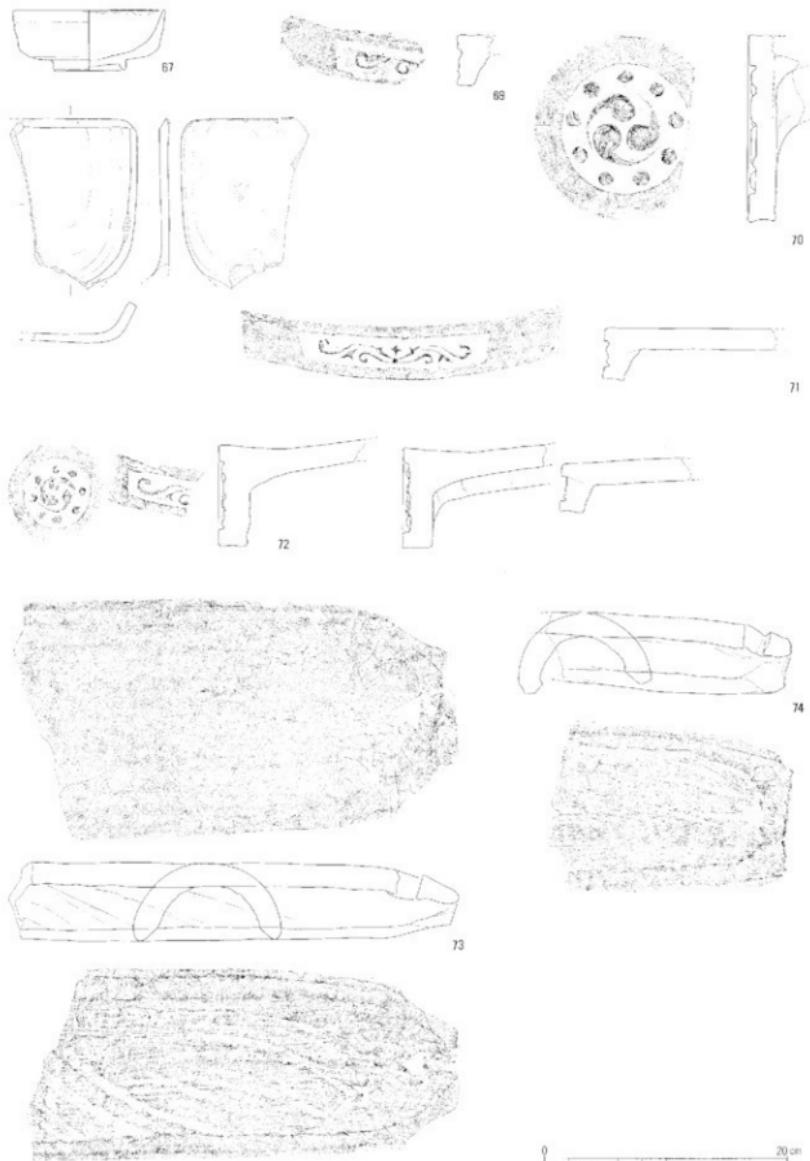


第12図 SK 102出土遺物実測図 (1: 4)



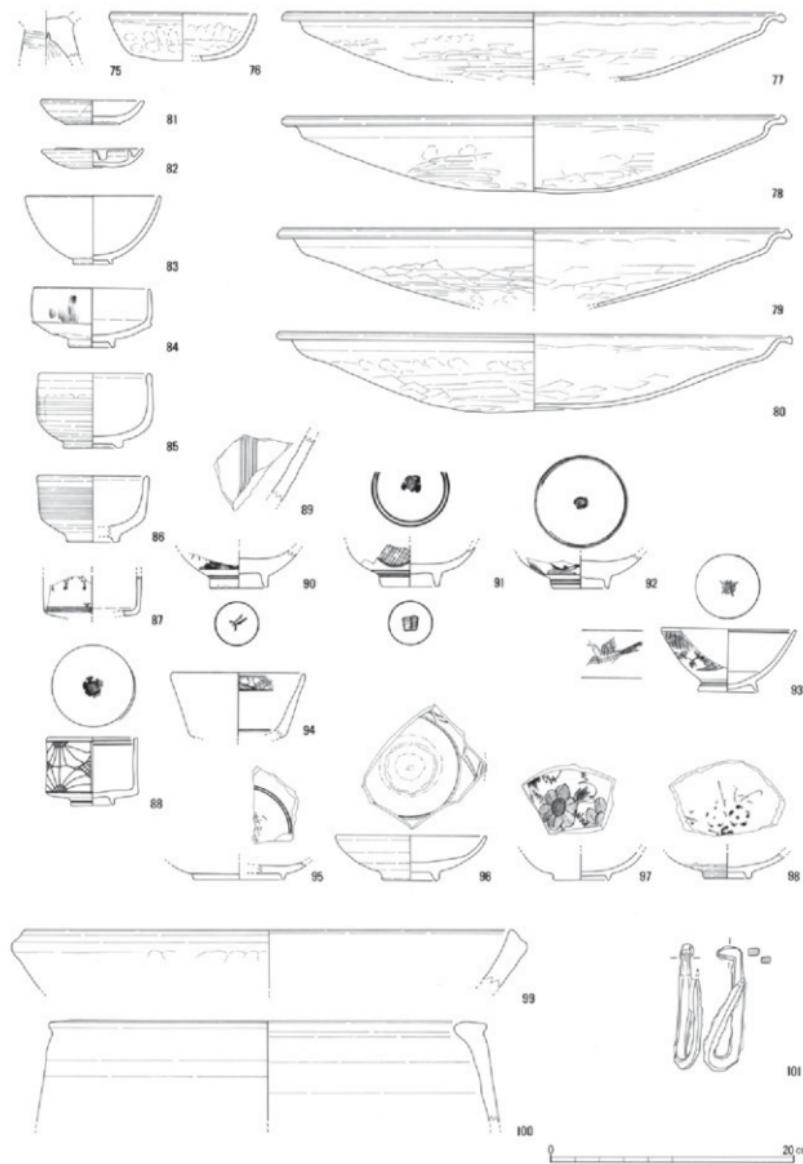
0 20 cm

第13図 SK 102出土遺物実測図 (1:4)



第14図 SK 102出土遺物実測図 (1:4)

0 20 cm



第 15 図 A 地区包含層他出土遺物実測図 (1:4)

け、39 の外面も網状文を中心とした染付である。38 の見込に施された花文は鮮明に欠け、コンニヤク印判と思われる。外面には水玉状の文様が染付けられる。40 は小瓶、41・42 は皿である。皿は両者とも草花文で装飾され、見込には五弁花文を施し、これもコンニヤク印判によると思われる。

43～50 は施釉陶器で、43 は植木鉢、44 は鍋、45～47 は蓋、48・49 は片口鉢、50 は土瓶である。43 の外面の文様は浮文状に浮き出したものである。46・50 は同様な柿釉が施され、46 は50 の壺の可能性がある。48 の内面には3 方にトチンの痕跡が残る。

51 は陶器の壺か甕の底部、52 も同様で半胴と思われる。53 は火鉢で3 方に低い脚を貼り付ける。内面には6ヶ所にトチンの痕跡が残る。

57 は瓦質土器で火鉢としたが、外面に煤が付着し火鉢とするに疑問の残るものである。3 方に小さい脚を貼り付ける。

58～60 は陶器の擂鉢で、全て瀬戸美濃と思われる。64 も鉢としたが甕の可能性もある。65・66 は陶器の甕で、両者とも内面の粘土縫接合痕に沿って粘土を押さえにより補充している。

67 は木製品の椀で内外面に黒漆を施す。68 は十能の受部で瓦質である。

69～74 は瓦で、全て焼されている。69・71 は軒平瓦で唐草文を施し、70 は丸瓦で巴文を施す。72 は棟瓦、73・74 は丸瓦である。丸瓦は三角形の釘穴が穿たれ、凹面には布目や紋痕が明瞭である。73 の凹面頂部には粘土が補充された痕跡が残る。

(8) A 地区包含層他出土遺物（第15図）

75 は弥生土器の高杯で、今回の出土遺物では最も古いものである。脚基部に描画の横線文を施し、後期のものと思われる。76 は土器碗、72～80 は培培である。培培は全て外面に煤が付着し内面にも炭化物の付着が認められる。89 は擂鉢である。小片であるが5条1單位の擂目を施す。信楽と思われ16世紀にさかのばるものであろう。

81 は施釉陶器の皿で、志野と思われる。白色の釉を口縁部から体部上半を中心に施す。82 も施釉陶器で、灯明受皿である。受部は口縁部と同等の高さで、方形の切欠を設け油溝としている。

83～86 は施釉陶器の椀、98 は皿、84 はせんじ、85・86 は腰錆椀、87 は陶胎染付の筒形椀、98 は梅文皿と称されるものである。いずれも18世紀後半から19世紀の瀬戸美濃と思われるが、83 は不明としておく。84 は淡い草花文、87 にも草花文が施されたものと推測される。86 の外面はカキメを装饰風に施し、85 も同様であるが、カキメとするには滑らかなものである。

88・90～97 は磁器で、88・90～94・97 は椀、95・96 は皿である。88 は筒形椀と称されるもので見込にはコンニヤク印判による五弁花文が施される。同様な五弁花文は91・92 にも施され、96 の見込は蛇目釉となる。草花文や蔓草文系で装飾されるが、93 には小鳥が付加され、95 には漢字が描かれているようである。93 は瀬戸美濃、他は18世紀後半から19世紀の肥前の染付と考えられるが、96 は若干遅り、逆に93 は近代に下るものである。

99 は陶器の鉢、100 は甕である。101 は鉄製の貝折釘で、鍛冶により曲げられており、古鉄材として再利用される予定であったものと考えられる。

(9) B 地区包含層他出土遺物（第16図）

102・103 は磁器、104～106 は陶器である。102 は微塵唐草文様を施す小杯で、外面に直接重焼の痕跡が残る。104 は行平鍋の蓋と思われ、天井部外面に渦巻状の浅い沈線が認められる。文様を意識したものか単なる調整痕かは不明である。105 は急須としたが、行平鍋の可能性もある。103・106 は近代に下るものである。

(10) D 地区包含層他出土遺物（第16図）

107 は土器の鍋、108 は須恵器の杯、109～115 は施釉陶器である。107 は鍋としたが培培の可能性もある。鍋とすれば室町末期、培培とすれば近世の可能性が強い。108 は受部をもつもので、口縁部は比較的高いが6世紀に納まるものである。110 は椀、109・112 は皿、111 は小鉢、113 は鉢、114 は德利、115 は行平鍋である。112・113 には鉄絵が施され、112 は口縁端部に直接重焼痕、113 は見込にトチン痕がある。両者と114 は瀬戸美濃であるが、114 は近代に下るものである。

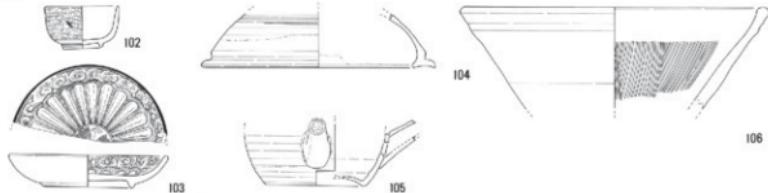
116～120は磁器で120を除き肥前の染付と考えられる。116は小杯としたが、紅猪口の可能性がある。口縁部外面を雨降柳文で装飾する。117～119は皿、120は蓋で、119は蛇目凹形高台をもつ。117の内面は円形繁文、外面に唐草文、118は内面に鳥が描かれ外面は唐草文か草花文、119の内面には草花文が染付けされる。これらの磁器は18世紀から

19世紀前半に収まるものであるが、120は近代に下るものと考えられる。

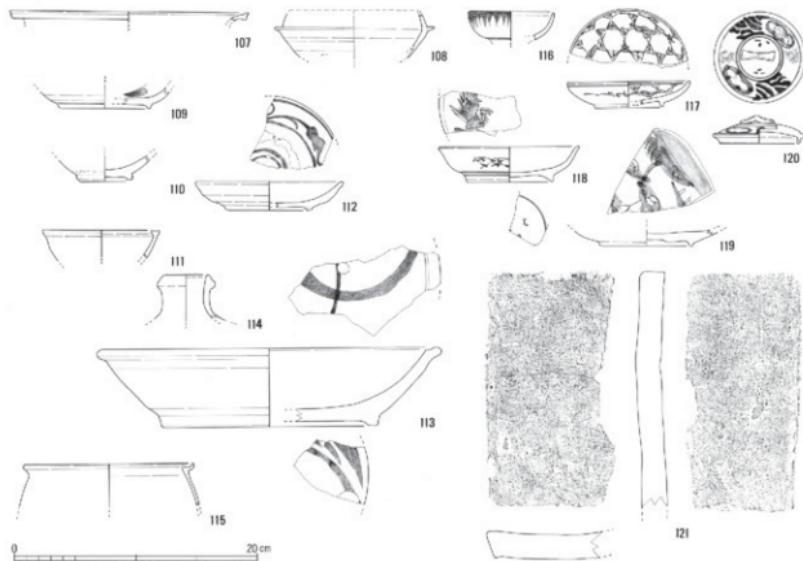
121は平瓦で凹凸面とも工具によるナデで調整される。

これらの他に整地層から近代に下るものと思われる御用德利2個（写真P 44）が完形またはほぼ完形で出土している。

B地区



D地区



第16図 B地区・D地区出土遺物実測図（1:4）

番号	測量 面番号	遺構	出土 位置	器種 品番	出 量 (kg)	調整段の特徴	胎土	残存度	備考
				口径 高さ 幅	底面 高さ その他				
1	14-3	3D100	A-100	土器器 類	14.8	表面外 面内 部	西：に凸・幅7.5mm/3 西：内面・ハケメ 内面・ナゲ・木製箋	表(～3mmの砂粒 含)、底(～3mmの砂粒 含)	縦部2/12残
2	14-2	3D100	A-100	土器器 類	16.6	表面外 面内 部	表面外 面内 部	表(砂粒含)、底(砂 粒含)	口縁部2/12残
3	8-2	3D100	A-103	山茶碗	高台径 8.5 厚 2.5	ロクロナガ	底白2.5mm/1	表(～3mmの砂粒 含)	底部2/12残
4	8-3	3D101	A-103	山茶碗	高台径 8.5 厚 2.5	ロクロナガ	底白2.5mm/1	表(底部含)	底部外面部切削、 内面に自然 剥
5	15-2	SK111	B1-E2	土器器 類	16.6	表面外 面内 部	西面：ナゲ・木製箋 内面・ナゲ	表(～3mmの砂粒 含)	口縁部2/12残
6	15-1	SK111	B1-E2	土器器 類	16.6	表面外 面内 部	西面：ナゲ・木製箋 内面・ナゲ	表(～3mmの砂粒 含)	口縁部2/12残
7	16-1	SK111	B1-E2	土器器 類	23.1	内外面上半ハケメ、下半 ハラクタメ	西：内・黒焼10mm/1 内・黒焼10mm/1	～3mmの砂粒含	上半部外面部にヌク付 壁部が無い。
8	16-5	SK111	B1-E2	ロクロ土器器 類	9.0	高台径 9.0	ロクロナガ	西：に凸・黄焼10mm/3 内：内面・ナゲ	底部4/12残
9	16-5	SK111	B1-E2	山茶碗	16.0	ロクロナガ	底白2.5mm/1	表(～3mmの砂粒 含)	底部外面部切削、 内面に自然 剥
10	18-3	SK112	B1-E3	ロクロ土器器 類	15.0	3.4	底焼 6.0	ロクロナガ	縦7.5mm/6
11	18-1	SK112	B1-E3	ロクロ土器器 類	15.0	3.4	底焼 6.0	ロクロナガ	やや密(企葉含)
12	19-1	SK112 No.2	B1-E2	土器器 類	25.0	内外面上半ハケメ、下半 ハラクタメ	西：に凸・黄焼10mm/3・灰焼 7.5mm/1・内：内面・黄焼10mm/4・灰焼 7.5mm/1・下：に凸・黄焼 7.5mm/2	表(～3mmの砂粒 含)	口縁部4/12残
13	17-2	SK112	B1-E2	山茶碗	16.4	8.0	高台径 8.0	ロクロナガ	口縁部2/12残
14	17-3	SK112 No.2	B1-E3	山茶碗	高台径 7.0	ロクロナガ	底白2.5mm/1	やや密	底部外面部 自然剥
15	17-1	SK112 No.2	B1-E3	湯器	湯器 7.0	湯器 7.0	内面・ナゲ・タカシ 内面・ナゲ	西：内・黒焼10mm/1 内：内面・ナゲ	底部完全
16	27-5	SK112	B1-E2	土器器 類	16.0	ロクロナガ	西：内・黒焼10mm/1 内：内面・ロクロナガ 内：内面・ロクロナガ	やや密(～3mm以 下の砂粒含)	縦部原体幅2.5cm、内面 自然剥、底部外面部研削
17	14-1	SK107	A-B10	湯器	高台径 4.5	湯器 4.5	湯器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	西：内・黒焼2.5mm/2 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	底部完全
18	13-1	SK107	A-B10	湯器	28.0	湯器 4.5	湯器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	西：内・黒焼10mm/4 裏：内面・ロクロナガ	削除剥落、内面部研削 内面に3.5-5.0cmの凹凸
19	34-6	P111	A-A9	施釉陶器 類	13.7	7.2	高台径 7.2	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：黑青焼10mm/2	表(灰) 底(黑青焼10mm/2)
20	24-1	P111	A-A9	施釉陶器 類	9.7	4.6	高台径 9.7	ロクロナガ	表(灰2.5mm/1) 底(オーバーパー ク) 砂粒含)
21	34-4	P111	A-A9	施釉 陶器	9.7	4.6	高台径 9.7	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：黑青焼10mm/2	表(灰) 底(黑青焼10mm/2)
22	34-5	P111	A-A9	施釉 陶器	9.3	4.7	高台径 9.3	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：黑青焼10mm/2	表(灰) 底(黑青焼10mm/2)
23	30-1	P111	A-A9	施釉陶器 類	14.3	9.8	高台径 9.3	施釉陶器ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	表(灰) 底(明青焼10mm/2) 砂粒含)
24	25-3	P111	A-A9	施釉陶器 類	16.7	—	ロクロナガ	施釉陶器 施：灰G16 施：黑青焼10mm/2	口縁部2/12残 口元欠損
25	2-7	SK102	A-B6	施釉陶器 類	11.9	5.0	高台径 4.0	ロクロナガ	表(灰) 底(オーバーパー ク) 砂粒含)
26	29-3	SK102	A-B6	施釉陶器 類	11.8	5.9	高台径 4.3	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	小密(～3.5mm 以下の砂粒含)
27	24-7	SK102	A-B6	施釉陶器 類	12.0	5.8	高台径 4.3	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	底部4/12残 底部外面部
28	24-6	SK102	A-B6	施釉陶器 類	12.5	6.2	高台径 4.7	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	表(灰) 底白2.5mm/1 底白2.5mm/2 底白2.5mm/2
29	29-5	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	9.3	5.1	高台径 3.8	内面・カキメ 内面・ロクロナガ	表(灰) 底(灰) 砂粒含)
30	29-6	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	9.0	5.0	高台径 3.6	内面・カキメ 内面・ロクロナガ	小密(～3mm 以下の砂粒含)
31	24-5	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	8.7	5.6	高台径 3.6	施釉陶器ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	表(灰) 底(灰) 砂粒含)
32	24-6	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	8.7	5.7	高台径 3.7	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	底部6/12残 底部外面部
33	27-6	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	6.7	—	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	表(灰) 底(灰) 砂粒含)	底部外面部 削除
34	24-2	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	5.7	—	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	表(灰) 底(灰) 砂粒含)	肥前 内面部 自然剥、削除
35	33-3	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	11.0	—	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：明青焼10mm/2	表(灰) 底(灰) 砂粒含)	底部5/12残 底部外面部
36	33-5	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	9.8	5.0	高台径 4.0	施釉陶器表面ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ 裏：内面・ロクロナガ	表(灰) 底(灰) 砂粒含)
37	33-4	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	10.0	5.0	高台径 4.3	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：明青焼10mm/2	底部6/12残 底部外面部
38	33-1	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	12.1	5.6	高台径 5.0	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：明青焼10mm/2	底部6/12残 底部外面部
39	34-2	SK102	A-B6	施釉陶器 腰錠茶碗	9.8	4.6	高台径 4.5	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：明青焼10mm/2	底部6/12残 底部外面部
40	34-1	SK102	A-B6	施釉陶器 小瓶	—	—	施釉陶器の手削 施：灰G16 施：明青焼10mm/2	底部完全	肥前 染村

第1表 出土遺物観察表（1）

番号	実測 寸合	遺構	出土 位置	器種 器形	法 寸合	量 (cm)	調査技法の特徴	色 調	胎土	残存度	備考
41-34-3	38.02	A-BB	施釉 窓	13.5	3.9	裏面 内面	窓側 施釉のため不規 則	素地：灰白土 施釉：明褐色(1067/1)	茶	口縁部5/12残 内部5/12残	肥前 磁付
42-33-2	38.02	A-BB	施釉 窓	14.0	3.1	裏面 内面	窓側 施釉のため不規 則	素地：灰白土 施釉：G18 地：灰白色(509/1)	茶	口縁部5/12残 内部5/12残	肥前 磁付
42-25-2	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	17.0			ロクロナザ	裏地：灰白土38.0/2 施釉：オーラー37.5/4	中や濃 地：オーラー37.5/4	口縁部1/12残	船戸美濃 外面に浮文
44-29-1	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	16.0			外面部下部ロクロケズ リ、他はロクロナザ	裏地：灰白土37.5/1 施釉：灰白土37.5/1	中や濃 地：灰白土37.5/1	口縁部5/12残	船戸美濃 外面に浮文
45-28-4	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	6.8	2.7	受継裡 9.0	天井部外面部ロクロケズ リ、他はロクロナザ	裏地：灰白土19.0/7.7 施釉：灰白土37.5/2	茶(1mm以下の砂 粒含)	ほぼ完形	土瓶の蓋
46-29-2	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	8.2	3.0		ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/1 施釉：灰白土37.5/3	口縁部7/12残	土瓶の蓋 内面スリット有	
47-24-9	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	6.9			ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/2 施釉：G18 37.5/4	中や濃 地：G18 37.5/4	つまみ欠損	船戸美濃 土瓶の蓋
48-22-2	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	16.0	10.2	裏面 内面	底部外面部ロクロケズ リ、他はロクロナザ	裏地：灰白土37.5/2 施釉：灰白土37.5/2	中や濃 地：灰白土37.5/2	口縁部5/12残 内部5/12残	船戸美濃 内面底に3カ所ト ナン青 瓦付高台
49-25-4	38.02	A-BB	施釉陶器 窓	20.4			ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/2 施釉：灰白土37.5/2	茶(1mm以下の砂 粒含)	口縁部1/12残	船戸美濃
50-29-3	38.02	A-BB	施釉陶器 土瓶	16.3			ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/1 施釉：G18 37.5/4	中や濃 地：G18 37.5/4	体部1/4残	体部下半に薄厚く付着
51-28-1	38.02	A-BB	陶器 蓋	14.4			ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/1 施釉：G18 37.5/1	中や濃 地：G18 37.5/1	底部2/12残	船戸美濃
52-25-1	38.02	A-BB	陶器 手鏡	14.0	7.7		外面部 内面	裏地：灰白土37.5/1 施釉：G18 37.5/1	中や濃 地：G18 37.5/1	底部2/12残	船戸美濃 付高台
53-19-1	38.02	A-BB	施釉陶器 火鉢	29.4	15.2		底部外面部ロクロケズ リ、他はロクロナザ	内輪：灰白土37.5/1 施釉：G18 37.5/3	茶(1mm以下の砂 粒含)	3/12残	船戸美濃 内面トチン所に風 呑5箇所あり 三足脚り付け
54-8-4	38.02	A-BB	土器 片	8.0	1.9		ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/1	茶	1/12残	
55-8-1	38.02	A-BB	土器 蓋	12.3			ハケメ	外：にぶい黄7.5TR7/4 内：にぶい黄10TR6.4	中や濃 地：にぶい黄10TR6.4	口縁部2/12残	
96-7-2	38.02	A-BB	土器 蓋	13.5			ハケメ	にぶい黄10TR6.5/3	中や濃 地：にぶい黄10TR6.5/3	口縁部2/12残	
57-8-5	38.02	A-BB	瓦質土器 火鉢	21.0			ロクロナザ	外：灰53/ 内：灰48/	茶	底部1/12残	三足、外面上に腐食
58-28-7	38.02	A-BB	陶器 手鏡	26.4			ロクロナザ	裏地：にぶい黄10TR7/3 施釉：G18 37.5/3	中や濃 地：G18 37.5/3	口縁部1/12残	船戸美濃
59-21-1	38.02	A-BB	陶器 手鏡	36.4			ロクロナザ	裏地：西濃白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	茶(1mm以下の砂 粒含)	口縁部2/12残 内部5/12残 3.7mmの頭目	船戸美濃
60-23-1	38.02	A-BB	陶器 手鏡	32.4	12.0		底面外面部ロクロケズ リ、他はロクロナザ	裏地：白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	中や濃 地：白10TR6.3	口縁部2/12残 内部5/12残	船戸美濃
61-21-3	38.02	A-BB	陶器 手鏡	32.4	13.7		ロクロナザ	裏地：白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	中や濃 地：白10TR6.3	小片	船戸美濃
62-21-4	38.02	A-BB	陶器 手鏡	32.4			ロクロナザ	裏地：灰白土37.5/2 施釉：G18 37.5/3	茶(1mm以下の砂 粒含)	口縁部2/12残	船戸美濃 内面若目
63-21-2	38.02	A-BB	陶器 手鏡	32.4			底面 内面	裏地：白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	中や濃 地：白10TR6.3	口縁部2/12残 内部5/12残 3.7mmの頭目	船戸美濃
64-7-1	38.02	A-BB	陶器 手鏡	32.4			底面 内面	裏地：白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	中や濃 地：白10TR6.3	口縁部2/12残	船戸美濃
65-12-1	38.02	A-BB	陶器 手鏡	32.4			底面 内面	裏地：白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	中や濃 地：白10TR6.3	口縁部2/12残	内面調整の後、粘土補充あり
66-11-1	38.02	A-BB	陶器 手鏡	36.0			工芸ナガ ナダ	裏地：白10TR6.3 施釉：G18 37.5/3	茶(1mm以下の砂 粒含)	口縁部1/12残	内面調整の後、粘土補充あり
67-1-1	38.02	A-BB	木製品 漆器	12.4	4.9	内面 内面	ロクロナザ	トチノキ	1/12残	内外面に崩落	
68-9-1	38.02	A-BB	瓦質土器 火鉢	3.3			ハラケマツリ	裏地G18/3	中や濃 地：G18/3	1/3残	
69-6-7	38.02	A-BB	瓦 軽平瓦	4.2			工芸ナガ	灰白土3.5/2	中や濃 地：灰白土3.5/2	瓦頭部1/3残	草写文 摩滅が激しい
70-6-1	38.02	A-BB	瓦 軽平瓦	4.2			直角棒 ナダ	暗赤NS/1	中や濃 地：暗赤NS/1	瓦頭部1/3残	巴文
71-5-1	38.02	A-BB	瓦 軽平瓦	4.2	27.2	工具ナダ	暗赤NS/1	中や濃 地：暗赤NS/1	中や濃 地：暗赤NS/1	1/3残	均整密草文 段階
72-5-2	38.02	A-BB	瓦 瓦	8.2			圓筒 ナダ	裏地G18/3	中や濃 地：G18/3	1/4残	巴文+草写文 段階
73-4-1	38.02	A-BB	瓦 瓦	6.2			外面部 内面	ハラケマツリ ナダ	裏地2.5mm以下の砂 粒含)	1/3残	正三角形の軒穴 面に粘土補充あり
74-4-2	38.02	A-BB	瓦 瓦	6.2			外面部 内面	ハラケマツリ ナダ	裏地2.5mm以下の砂 粒含)	1/3残	正三角形の軒穴
75-13-6		A-BB	生土器 瓦	3.9			細面棒 ナダ	口縁部5/8	茶(2.5mm以下の砂 粒含)	断面横棒5.0~9.0cm	
76-13-5	P-1	A-BB	土器器 柄	13.6	3.9		ナダ・束調整	7.0TR6/4	茶(2.5mm以下の砂 粒含)	1/12残	
77-2-1	A-表土	土器器 柄	41.0			内外面	ハラケマツリ	外：灰質粘土 内：灰質粘土	口縁部5/12残	外面塗付材 内面コグ付材	
78-3-2	A-表土	土器器 柄	41.0	6.2		内外面	ハラケマツリ	外：灰質粘土 内：灰質粘土	1/12残	外面塗付材 内面コグ付材	
79-2-2	A-表土	土器器 柄	41.0			内外面	ハラケマツリ	外：灰質粘土 内：灰質粘土	口縁部2/12残	外面塗付材 内面コグ付材	

第1表 出土遺物観察表（2）

番号	実測 寸法	遺構	出土 位置	器種 器形	計量 (cm)			調整技法の特徴	色調	出土	保存度	備考
					口径	高さ	その他					
80 3-1		A-表土		土器器 筒型	42.0	6.2		内外面ハタケヅリ	外：底刷毛目3/1 内：底刷毛目3/1+刷 毛2.5/2/2	茶(～3mmの砂粒 含)	5/12残	外側糊付着 内面ログ付着
81 13-4		A-陶瓦		施釉陶器 皿	8.5	2.0	高台径 底盤内面ロクロケズ リ、他はロクロナダ	施釉：底白1.5/2/1 内面：ロクロケズリ	茶(～3mmの砂粒 含)	5/12残	古野 削出高台	
82 26-3		A-表土		施釉陶器 灯明受皿	8.3	1.8	底盤 内面：ロクロケズ リ	施釉：底白1.0/1/1 内面：ロクロケズリ	茶	底部完全	湘戸光濃 底盤外側に毫痕	
83 24-4		A-表土		施釉陶器 皿	11.1	5.6	高台径 底盤内面ロクロケズ リ、他はロクロナダ	施釉：底白2.5/7/3 内面：底白1.0/2/2	口縁部3/12残 底盤部1/4残	削出高台		
84 24-3		A-表土		施釉陶器 皿(?)	9.4	4.9	高台径 底盤内面ロクロケズ リ、他はロクロナダ	施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/2/1	口縁部3/12残 底盤部1/4残	削出高台		
85 27-1		A-表土		施釉陶器 便器系	9.0	6.1	高台径 底盤内面ロクロケズ リ、他はロクロナダ	施釉：底白1.0/1/1 内面：底白1.5/2/1	小やけ茶(～3mm以 下の砂粒含)	底部3/12残	湘戸光濃 削出高台	
86 27-2		A-表土		施釉陶器 便器系	9.0	5.5	高台径 底盤内面 便器系	施釉：底白1.5/1/1 内面：ロクロナダ	小やけ茶(～1.5mm 以下砂粒含)	底部3/12残	湘戸光濃 削出高台	
87 29-4		A-表土		施釉陶器 便器系				施釉：底白1.5/1/1	茶	1/4残	湘戸光濃 陶胎付	
88 32-2		A-表土		器皿 笠形	7.5	3.5	高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1	茶	口縁部3/12残 底盤部12/11残	肥前 染付	
89 13-3		A-陶瓦		陶器 笠形			ロクロナダ	茶(～1.5mmの砂 粒含)	小片		底灰	
90 31-1		A-表土		施釉陶器 皿			高台径 底盤内面ロクロケズ リ、他はロクロナダ	施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/2/1	茶	底部3/12残	肥前 染付 削出高台	
91 31-3		A-表土		施釉陶器 皿			高台径 底盤内面 ロクロナダ	施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	茶	高台部11/12残	肥前 染付 削出高台	
92 31-2		A-表土		施釉陶器 皿			高台径 底盤内面 ロクロナダ	施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	茶	底盤部完全	肥前 染付 陶胎付	
93 30-3		A-表土		施釉陶器 皿	11.0	5.1	高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1 内面：ロクロケズ リ、他はロクロナダ	口縁部3/12残 底盤部11/12残	削出高台		
94 32-4		A-B 器皿 包合層		施釉陶器 皿	11.0			施釉：底白1.0/1/1 内面：底白1.0/2/1	茶	1/12残	肥前 青磁染付	
95 32-3		A-表土		施釉陶器 皿			高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	茶	高台部1/12残	肥前 染付	
96 26-1		A-表土		施釉陶器 皿	12.3	3.7	高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1 内面：ロクロナダ	茶(底盤部1片 破損)	底盤部1片 底部3/12残	肥前 染付 削出高台 直轄地裏蔵	
97 32-1		A-表土		施釉陶器 皿	4.7			施釉：底白1.5/1/1	茶	高台部1/12残	肥前 青磁染付	
98 26-2		A-表土		施釉陶器 皿			高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1 内面：ロクロナダ	口縁部3/12残 底盤部11/12残	削出高台		
99 13-2		A-陶瓦		陶器 鉢	40.0		外側：底 内側：底	外：底白2.5/8/6 内：底白2.7/8/7	茶	口縁部3/12残	湘戸光濃 削出高台	
100 26-4		A-表土		陶器 鉢	35.4		ロクロナダ	外：底白2.0/8/4 内：底白2.5/8/3	小やけ茶(金雲霞 含)5/12の下小 片含)	口縁部3/12残	常滑	
101 29-1		整地	土質剖 面付近	土器製品 土器	6.7	21.0	重	—	—	—	—	古跡材
102 31-4		B-I 表土		施釉陶器 小鉢	6.1	3.4	高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	茶	口縁部1/12残 底盤部10/11残	肥前 染付	
103 30-2		B-I 表土		施釉陶器 皿	13.9	2.6	高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/1 内面：ロクロナダ	茶	5/12残	湘戸光濃 染付 削出高台	
104 27-3		B-I 表土		施釉陶器 皿	15.6		外側：底 内側：底	施釉：底白2.5/8/2 内面：ロクロナダ	茶	口縁部3/12残	平手繩の繩	
105 27-4		B-I 表土		施釉陶器 皿			底盤 底盤内面	施釉：底白1.0/1/1 内面：ロクロナダ	茶	底部1/4残	平手繩?	
106 22-1		B-I 表土		陶器 盤	25.2		ロクロナダ	上：底白1.5/1/1 中：底白1.5/1/1	口縁部3/12残	口縁部3/12残 内面スジ跡9本/1cm		
107 37-3		B-II 表土		土器 盤	19.6		ヨコヨダ	上：底白1.5/1/1 中：底白1.5/1/1	茶	口縁部3/12残		
108 36-5		B-II 整地		土器 盤	10.5	13.0	受盤器 底盤	底盤内面ロクロケズ リ、他はロクロナダ	茶(～5mmの砂 粒含)内：2.5/2/1	茶	小片	
109 37-4		B-II 整地		施釉陶器 皿			高台径 底盤内面	施釉：底白2.5/8/3 内面：ロクロナダ	茶(～5mmの砂 粒含)内：2.5/2/1	茶	底部3/12残	削出高台
110 38-5 (SD)		D-C2		施釉陶器 皿	4.0			施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	底盤砂質・露舌含	口縁部3/12残		
111 38-4 (SD)		D-C2		施釉陶器 皿	9.6			施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	口縁部3/12残			
112 37-2		D-B 褐色土		施釉陶器 皿	12.0	2.5	高台径 底盤内面	ロクロナダ	底白2.5/1/4	口縁部3/12残	湘戸光濃	
113 37-1		D-B 褐色土 泥炭		施釉陶器 皿	28.0	6.4	高台径 底盤内面	施釉：底白2.5/8/3 内面：ロクロナダ	底白2.5/1/4	口縁部3/12残	湘戸光濃	
114 38-2 (SD)		D-C2		施釉陶器 皿	4.8			施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	口縁部完全	口縁部3/12残		
115 36-4		D-I 石列		施釉陶器 皿	14.9			施釉：底白2.5/1/3	茶	口縁部3/12残		
116 38-3 (SD)		D-C2		施釉陶器 皿	7.0			施釉：底白1.5/1/2 内面：底白1.5/1/2	茶	口縁部3/12残	肥前 染付	
117 36-2		D-B 褐色土 泥炭		施釉陶器 皿	10.0	2.1	高台径 底盤内面	ロクロナダ	底白2.5/1/2	口縁部3/12残	肥前 染付	
118 36-3		D-B 褐色土 泥炭		施釉陶器 皿	11.4	2.9	高台径 底盤内面	施釉：底白1.5/1/2 内面：ロクロナダ	底白2.5/1/2	口縁部3/12残	肥前 染付	
119 38-1 (SD)		D-C2		施釉陶器 皿	7.5			施釉：底白1.5/1/1 内面：底白1.5/1/1	茶	口縁部3/12残	桜井原形窯台	
120 36-1		D-B 褐色土 下層		施釉陶器 皿	6.4	2.3	受盤器 底盤	施釉：底白1.5/1/1 内面工藝による下 部、側面ケズリ	小やけ茶(～5mmの砂 粒含)内：2.5/2/1	口縁部3/12残		
121 39-1		D-B 褐色土 平瓦								5/12残		

第1表 出土遺物観察表 (3)

4 自然科学分析

S K 102 出土の黒漆椀（67）及び赤漆椀（断片）について、塗膜分析及び樹種の同定を行った。

（1）塗膜分析

A 分析内容

漆膜の断面観察を行った。また、赤色部分において蛍光 X 線分析による顔料分析を行った。

B 使用機器

エネルギー分散型蛍光 X 線分析（XRF）装置
セイコーインスツルメンツ㈱ SEA5230 試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の X 線（蛍光 X 線）を検出することにより元素を同定する。

分析条件：モリブデン管球を使用し、管電圧 45 kV・コリメータφ 18 mm・大気圧下で 120 秒間 X 線を照射した。

生物顕微鏡 ブラウンズ BX-50

金属顕微鏡 ブラウンズ BH2-UMA

C 方 法

黒と赤漆椀の内外面から漆膜を微量採取した。次に、微量採取した漆膜をエボキシ樹脂で包埋後、ミクロトームと研磨剤を用いて光が透過する薄い漆膜断面の切片を作製した。永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡による透過観察および金属顕微鏡による落射・暗視野観察を行い、写真撮影を行った。

赤漆椀では赤色部分と黒色部分に X 線を照射し XRF 分析を行い、顔料の種類を検討した。

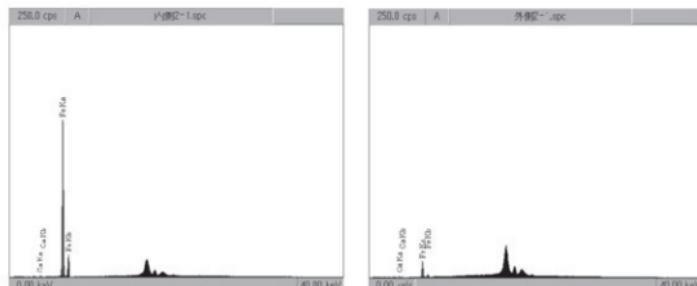
D 結 果

黒漆椀（67） 黒漆椀の漆膜採取箇所及び漆膜断面を写真（P 45）に示し、漆膜採取箇所については丸印を表示した。以降、断面写真は左側が生物顕微鏡による透過観察の写真、右側が金属顕微鏡による落射・暗視野観察の写真である。

外面では、木地は観測されず、下地は木炭粉が観

資料番号	資料名	分析内容	備考
67	黒漆椀	塗膜分析・樹種同定	保存処理
A	赤漆椀（高台付）	塗膜分析・樹種同定	—
B	赤漆椀（高台なし）	塗膜分析・樹種同定	—

第2表 分析対象資料および分析内容



第 17 図 赤漆椀（A）の XRF 結果（左：内面の赤色部分、右：外面の黒色部分）

Z	元素	元素名	ライン	内面の赤色部分 (cps)	外面の黒色部分 (cps)	R O I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	8.331	13.55	3.54–3.84
26	Fe	鉄	K α	1300.078	133.346	6.23–6.57

第3表 赤色椀（A）の XRF 結果まとめ

測され、その上に黒色層と表面が茶褐色に変色した黄褐色透明漆層が1層観測された。内面では、本地は観測されず、下地は木炭粉が観測され、垂直に亀裂が入った黒色層と表面が茶褐色に変色した黄褐色透明漆層が1層観測された。

赤漆椀（A） 赤漆椀の漆膜採取箇所を写真（P 46）に丸印で示し、XRF測定箇所を矢印で示した。なお、赤漆椀（A）は高台付の椀片である。

漆膜断面についても写真（P 46）に示した。外面では、本地は観測されず、下地は木炭粉が観測され、その上に垂直に亀裂が入った黒色層と表面が茶褐色に変色した黄褐色透明漆層が1層観測された。内面では、本地は観測されず、下地は木炭粉がわずかに観測され、赤色漆層が1層観測された。

また、XRF結果を第17図と第3表に示した。外面の黒色部分と比較し、赤色部分では鉄が強く検出された。

赤漆椀（B） 赤漆椀の漆膜採取箇所を写真（P 47）に丸印で示した。また、XRF測定箇所を矢印で示した。なお、赤漆椀（B）は高台なしの椀片である。

漆膜断面写真についても写真（P 47）に示した。外面では、木材組織の付着と下地に木炭粉が観測され、漆膜の表面が茶褐色に変色した黄褐色透明漆層が1層観測された。内面では、本地と下地は観測さ

れず、赤色漆層とその上に垂直の亀裂が多数入った黄褐色透明漆層が観測された。

また、XRF結果を第18図と第4表に示した。内面の黒色部分と比較し、赤色部分では鉄が強く検出された。

E 考 察

黒漆椀（67） 断面観察の結果、外面では炭粉下地でその上に3～9 μmの黒色層と約47 μmの黄褐色透明漆層が観察された（写真P 45）。

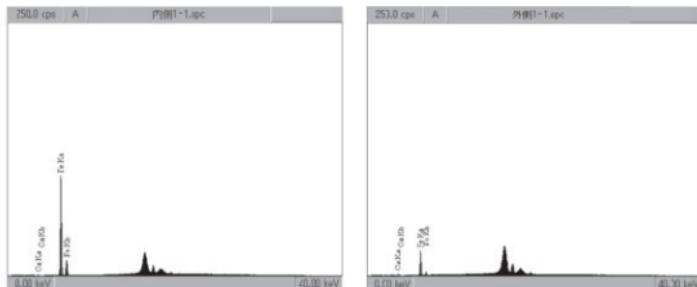
内面では、炭粉下地でその上に約18 μmの黄褐色層と約86 μmの黄褐色透明漆層が観察された（写真P 45）。

赤漆椀（A） 断面観察の結果、赤漆椀片（A）の外面では炭粉下地でその上に約15 μmの黒色層と約120 μmの黄褐色透明漆層が観察された（写真P 46）。

内面では炭粉下地でその上に約110 μmの赤色漆層が観察された（写真P 46）。XRFの結果（第17図と第3表）、赤色顔料はベンガラと考えられた。

赤漆椀（B） 断面観察の結果、赤漆椀片（B）の外面では炭粉下地でその上に約75 μmの黄褐色透明漆層が観察された（写真P 47）。

内面では50～55 μmの赤色漆層と約5 μmの黄褐色透明漆層が観察された（写真P 47）。なお、下地は観察されず、不明である。XRFの結果（第



第18図 赤漆椀（B）のXRF結果（左：内面の赤色部分、右：内面の黒色部分）

Z	元素	元素名	ライン	内面の赤色部分 (cps)	内面の黒色部分 (cps)	R O I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	4.257	16.587	3.54- 3.84
26	Fe	鉄	K α	820.884	208.692	6.23- 6.57

第4表 赤色椀（B）のXRF結果まとめ

18図と第4表)、赤色顔料はベンガラと考えられた。

(2) 樹種同定

A 同定内容および使用機器

樹種同定に必要な木口面(横断面)、板目面(接線断面)、柾目面(放射断面)の3断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフランで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製し、生物顕微鏡(㈱オリンパス BX-50)を用いて樹種同定を行った。

B 同定結果

各試料の木材組織は下記の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑本編』(I)(II)に従った。

* 樹木の性質、材の用途、出土事例等については後記の文献を参考とした。

黒漆椀 (67) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume

(とちのき科 Hippocastanaceae)

広葉樹、散孔材。直径50~70 μmの管孔が年輪内に均等に散在する。管孔は單独もしくは2~4個が放射方向に複合する。道管は單穿孔。放射組織は平伏細胞のみからなる同性で單列である。板目面において放射組織が層階状に配列している。

分 布: 温帶: 北海道、本州、四国、九州。

樹 形: 落葉高木で樹高25 m、胸高直径2 mに達する。

用 途: 家具、指物、建築、器具、漆器木地、経木 等。

出土事例: 挽物(漆器、皿)、剖物(槽、盤)、農具(臼) 等。

赤漆椀 (A) ブナ属 *Fagus* L.

(ぶな科 Fagaceae)

広葉樹、散孔材。試料は劣化が顕著であり木材組織の収縮によって特徴が不明瞭である。木口面では直径約30~40 μmの管孔が年輪内に密に分布する。管孔は單独もしくは2~3個が複合し、晩材部付近では直径、数とも次第に減少している。放射組織は板目面において2~5列が見られ、木口面において広放射組織を確認することが出来た。放射組織

は平伏細胞からなり、時に上下縁部に方形細胞がある異性である。道管は單穿孔有する。

ブナ属に入る樹種として、日本にはブナとイヌブナがある。本試料は顕微鏡観察による判断が困難であったためブナ属とした。

分 布: ブナ: 北海道(南部)、本州、四国、九州。

イヌブナ: 本州(岩手県から主として太平洋側、近畿地方、中国地方)、四国、九州、山中の森内に生える。

樹 形: ブナ・イヌブナ: 落葉高木で樹高20~25m、胸高直径60~70cmに達する。

用 途: 建築、器具、楽器、土木、船、轍轍細工、下駄、経木 等。

出土事例: 土木材、剖物、挽物、杓子 等。

赤漆椀 (B) ブナ属 *Fagus* L.

(ぶな科 Fagaceae)

広葉樹、散孔材。木口面では直径約50 μmの管孔が年輪内に密に分布する。管孔は單独もしくは2~3個複合し、晩材部付近では直径、数とも次第に減少している。放射組織は1~4列と広放射組織が見られる。放射組織の多くは平伏細胞からなり、時に上下縁部に方形細胞がある異性である。道管は單穿孔と階段穿孔を有する。

【参考文献】

- ・ 北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編』 I 1971年
- ・ 北村四郎・村田源『原色日本植物図鑑・木本編』 II 1979年
- ・ 烏地謙・伊東隆夫『国説木材組織』 1982年
- ・ 烏地謙・伊東隆夫『日本の遺跡出土木製品総覧』 1988年
- ・ 伊東隆夫『日本広葉樹材の解剖学的記載』 I 「木材研究・資料」第31号 1995年
- ・ 伊東隆夫『日本広葉樹材の解剖学的記載』 IV 「木材研究・資料」第34号 1998年

5 結語

今回の調査によって堀の内側の肩を検出することができ、堀の位置を確認することができた。

松阪城の堀は、「伊勢国松坂古城之図」等に描かれている。これらの絵図面によると堀の内側には土壘も存在していたことが分かり、古写真によれば堀は明治期の中頃までは存在したようである。また、堀や土壘の位置を現地形上に示した「松阪城復元図」が作成されている。平成7年度の三重県埋蔵文化財センターの発掘調査では、この図で示された位置で堀や土壘を確認している。今回の調査区は、「復元図」による南東角付近に位置する。検出した堀跡は「復元図」とほぼ一致しており、平成7年度の発掘調査結果と合わせると復元図の推定はほぼ間違いないものと考えられる。今回の調査では堀の南東角を検出することができなかつたが、これも「復元図」では調査区外20 mほどでの屈曲が推定されており、妥当なところである。また、今回の調査区内では堀の外側の肩までは検出できなかつたが、調査区内で分かる堀の幅は約18 m、水深約16 mであった。堀は総延長約2100 m、幅16～30 m、水深1～33 mであったということから堀の幅や深さも推定と矛盾していない。また、土壘についても確認することはできなかつたが、堀の内側では近世の遺物を伴う遺構は検出されず、間接的には土壘の存在を肯定できるものと考えられる。

次に、B地区で検出した整地であるが、整地以前の状態を一時期の堀肩とすれば、南東角の状況が調査区内で現れつつあるものと解釈できる。中世城館においては頻繁な改築が認められる場合があり、これも松阪城の改築の一端を表すものかもしれない。前身の潮田長助の城砦^①の可能性もある。一方、堀で囲まれる城域は不定形な形態を呈しており、堀が水堀であったことも加味すれば、蒲生の築城時に元来の河道または湿地状の窪地を整形して堀としたと推測することも可能である。この場合、この整地は築城時に元来の河道または窪地の一部を埋めて城内の面積を確保したものとすることができよう。いづれにしても、整地の時期を特定できなかつたこともあり、

現時点では推測の域を出ない。

【註】

- ① 松阪市『松阪市史別刊1』1983
- ② 門 瞳代司「松阪城跡」「三重の近世城郭」三重県教育委員会1984年3月30日
- ③ 前掲②と同じ
- ④ 三重県埋蔵文化財センター『松阪城三の丸五曲口跡発掘調査報告』1996.3
- ⑤ 前掲②と同じ
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター『伊賀国府跡・井氏館跡ほか』1993.3
- ⑦ 下村豈良男「松阪城」「三重県の城」株式会社郷土出版社 1991年11月19日
- ⑧ 前掲②と同じ

IV 久居城下町遺跡（第9次調査）・東鷹跡古墳

1 遺跡範囲とこれまでの調査

（1）遺跡名称と遺跡範囲

久居城下町は、近世の久居藩の城下町である。この城下町は三重県中央部を流れ、伊勢湾に注ぐ雲出川北岸の河岸段丘に位置しており、古絵図による研究などから、範囲は東西約1.2km、南北約0.5kmの、ほぼ長方形の形状であり、城下町の南西隅に藩主居館があったことが判明している^①。

埋蔵文化財包蔵地としては、藩主居館と城下町を合わせて「久居城址」とされていたが、それらの構造からは、城というよりは、陣屋と城下町に分けて考えた方が実態に即していると考えられ、三重県教育委員会と津市教育委員会で協議を行った^②。

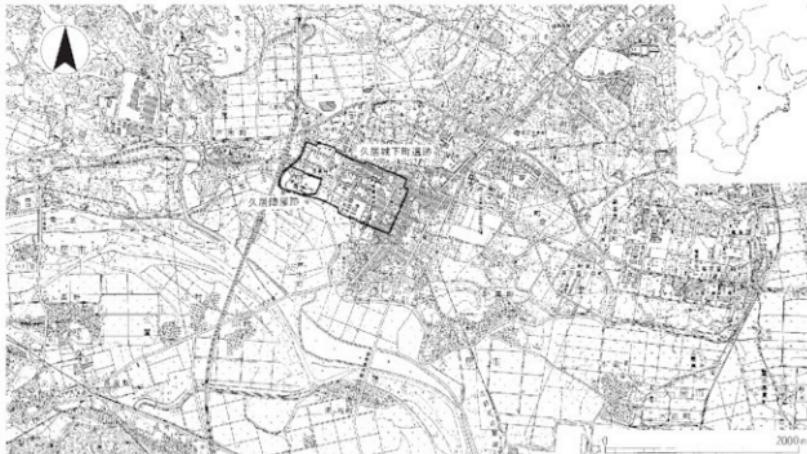
平成20～22年度に津市による市内全域の遺跡詳細分布調査が実施され、その際に藩主居館を「久居陣屋跡」に、それ以外を「久居城下町遺跡」と整理することとなった。遺跡範囲は、第20図に記したとおりである。

（2）これまでの調査

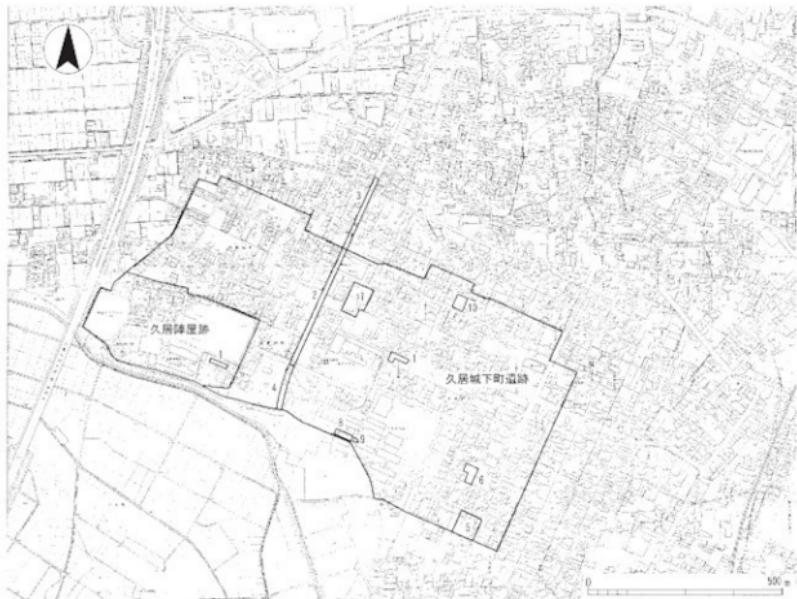
久居陣屋跡及び久居城下町遺跡のこれまでの調査箇所及び面積についても津市教育委員会によって整理が行われた。各調査の年度や場所などは、第20図、及び第5表のとおりである。これにより、平成19年度に久居農林高等学校特別教室棟改築工事に伴って行われた調査は、「久居城下町遺跡」の第8次調査となり、今回の報告書の対象とする調査は同遺跡の第9次調査となる。

【註】

- ① 桶田清砂「久居陣屋」『定本・日本の城』1991年 地土出版社
- ② 久居市教育委員会『三重県久居市 遺跡分布図』1984年
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『久居城下町遺跡・東鷹跡古墳』2008年
- ④ 津市教育委員会のご教示による。



第19図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「津西部」「津東部」「大仰」「松阪港」1:25,000より作成]



第20図 久居陣屋跡及び久居城下町遺跡本発掘調査位置図(1:12,500)

久居陣屋跡 本発掘調査

調査次数	調査機関	調査期間	調査箇所	調査原因	調査面積 (m ²)	備考
1	久居市	昭和57年11月～12月	津市久居西鷹跡町	マンション建設	500	

久居城下町遺跡 本発掘調査

調査次数	調査機関	調査期間	調査箇所	調査原因	調査面積 (m ²)	備考
1	久居市	昭和55年8月～9月	津市久居東鷹跡町	幼稚園建設	596	
2	久居市	平成3年7月～平成4年3月	津市久居西鷹跡町	県道久居・美杉線	2818	
3	久居市	平成4年2月～3月	津市久居万町	県道久居・美杉線	500	
4	久居市	平成5年8月～10月	津市久居西鷹跡町	県道久居・美杉線	1350	
5	久居市	平成6年4月～5月	津市久居東鷹跡町	宅地造成	1000	
6	久居市	平成7年5月～6月	津市久居東鷹跡町	福祉会館駐車場整備	655	
7	久居市	平成9年6月～7月	津市久居西鷹跡町	店舗建設		
8	三重県埋蔵文化財センター	平成19年4月～6月	津市久居東鷹跡町	学校建設	736	
9	三重県埋蔵文化財センター	平成21年5月～6月	津市久居東鷹跡町	学校建設	24	本報告
10	津市教育委員会	平成6年4月～10月	津市久居東鷹跡町	宅地造成	25	

第5表 久居陣屋跡及び久居城下町遺跡 本発掘調査一覧表

2 調査の概要

(1) 遺構・遺物

第9次調査は、平成19年度の調査（第8次調査）箇所の東側について調査を行った。当該箇所は、砂利敷きの通路であったが、鉄筋コンクリートの校舎ができる前に、この付近に木造の校舎が建てられていたとのことで、表土から1mほどが擾乱を受け、コンクリートの基礎や土台石が埋設されていた。

遺構は、第8次調査で確認されたSD 9の続きと考えられるSD 21を確認したのみである。SD 21の南端は、ゆるやかな弧を描くと考えられる。グリッドの1Aと1Bでは、溝底の深さが一定しないが、SD 9も溝底の深さが一定しておらず、埋土の状況も類似している。

遺物は、SD 21からの出土は少量であった。1は、土師器壺片で、古墳時代後期のものと考えられる。2は、表土から出土したもので、須恵器罐の口縁部と考えられる。3も表土から出土した磁器で、香炉であろうか。干網文が描かれている。18世紀末から19世紀初頭のものと考えられる。このほかの遺物は、擾乱から近世～近代の瓦・陶器小片が出土しているのみである。

第6表 出土遺物観察表

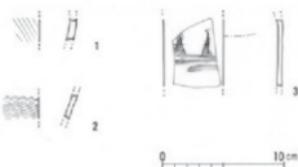
番号	実測番号	種・質	器種など	グリッド	遺構・番号	大きさ(cm)	調査・技法の特徴	出土	色調	保存度	特記事項
1	001-01	土師器	壺	1A	SD 21		内：ノックメ 外：泥引壺 内：無	密	内：泥引壺 外：無 100E/2.4	小片	
2	001-03	須恵器	罐	—	表土		内：漆器文 外：無	疏	100E/1	頭部1/12	
3	001-02	磁器	香炉？	—	表土	径9.8	内：クロコグザ模様 外：クロコグザ模様	密	表面：灰白 裏：灰白 100E/2.50E/1	体部1/12	

(2) まとめ

SD 9は、須恵器の装飾付高环形器台や提瓶、円筒埴輪などが出土し、古墳時代中期の「東鷹跡古墳」の周溝の一部と考えられている。今回の調査で確認されたSD 21もこの周溝の続きと考えられる。

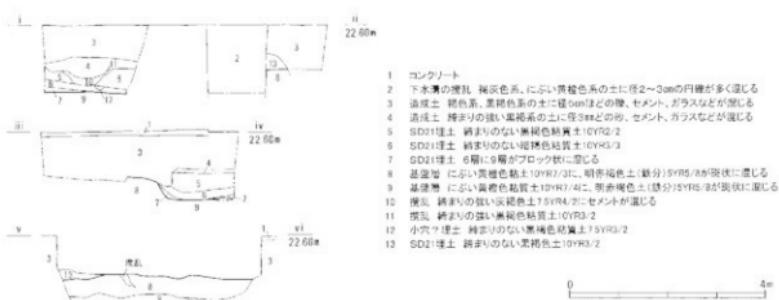
〔註〕

- ① 三重県埋蔵文化財センター『久居城下町跡遺跡・東鷹跡古墳』2008年
- ② 註①の文献と同一。

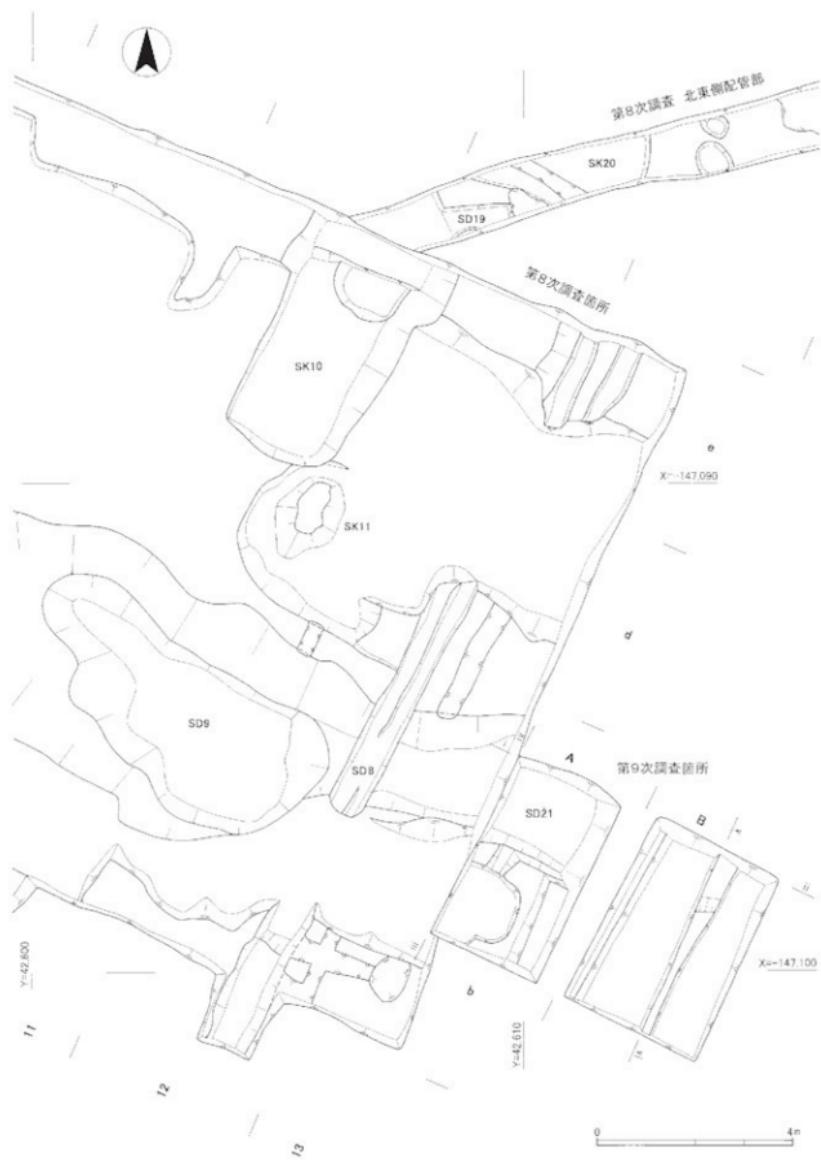


第21図 出土遺物実測図(1:4)

第7図 土層断面図(1:100)



第22図 土層断面図(1:100)



第23図 遺構平面図 (1:100)

松阪城跡



A地区調査前風景（北東から）



A地区全景（西から）

松阪城跡



B地区調査前風景（西から）



B地区全景（東から）

松阪城跡



B地区全景（北から）



C地区全景（東から）

松阪城跡



B地区堀跡 <人列より後方> (西から)



S D 1 1 2 (西から)

松阪城跡



SK 111 遺物出土状況（南から）



SD 112 遺物出土状況（西から）



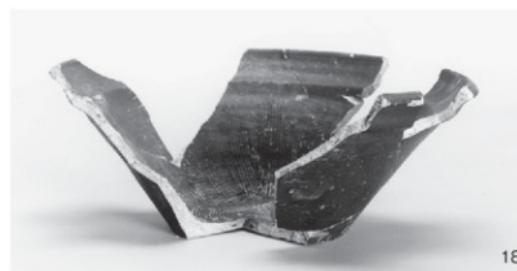
4



80



11



18



13



73



70



55

松阪城跡



陶磁器

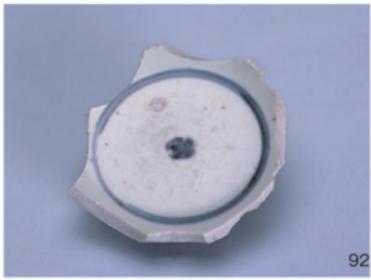


松阪城跡



陶磁器

松阪城跡



陶磁器

松阪城跡



118



119



35



116



95



19



90



91

陶磁器



67

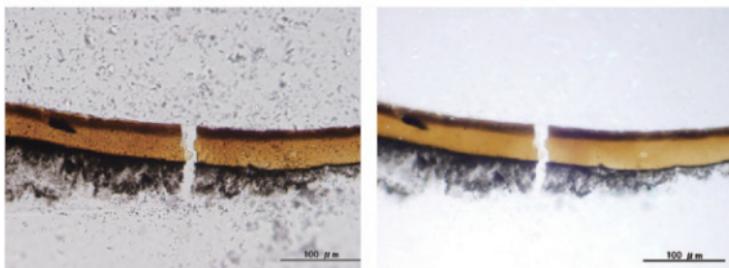


101

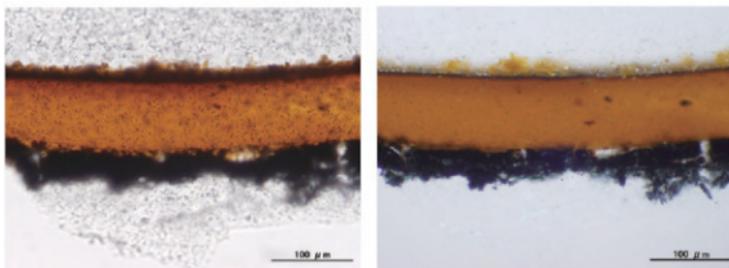
松阪城



黒漆椀 (67) の漆膜採取箇所（左：外面、右：内面）



黒漆椀 (67) の外面の漆膜断面写真（左：透過観察、右：落射・暗視野観察）

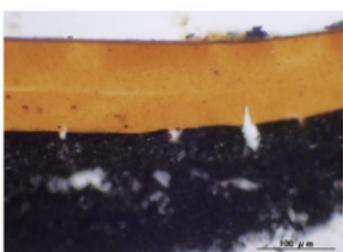
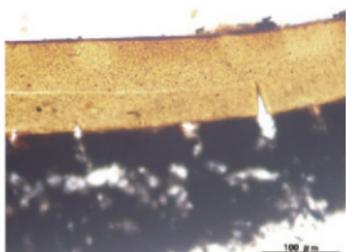


黒漆椀 (67) の内面の漆膜断面写真（左：透過観察、右：落射・暗視野観察）

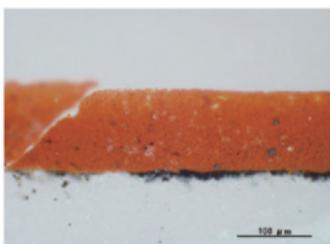
松阪城



赤漆椀（A）の漆膜採取箇所（左：外面、右：内面）

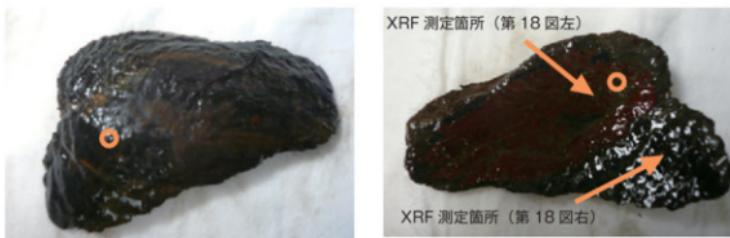


赤漆椀（A）の外面の漆膜断面写真（左：透過観察、右：落射・暗視野観察）

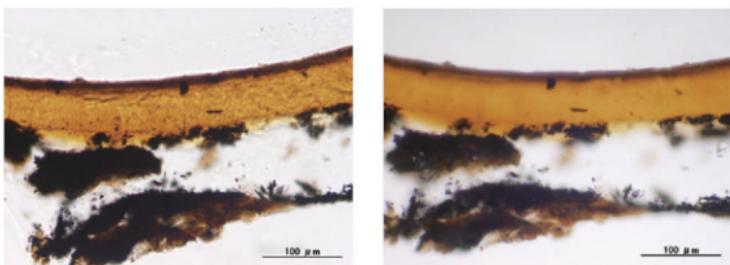


赤漆椀（A）の内面の漆膜断面写真（左：透過観察、右：落射・暗視野観察）

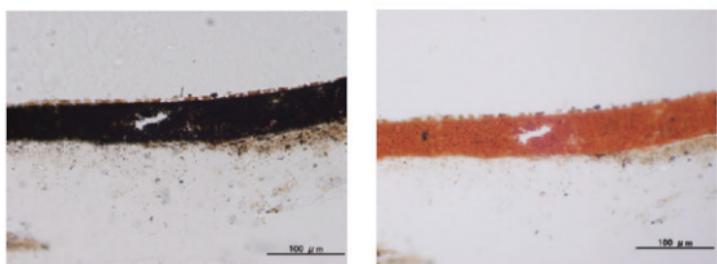
松阪城



赤漆椀 (B) の漆膜採取箇所 (左 : 外面、右 : 内面)



赤漆椀 (B) の外面の漆膜断面写真 (左 : 透過観察、右 : 落射・暗視野観察)



赤漆椀 (B) の内面の漆膜断面写真 (左 : 透過観察、右 : 落射・暗視野観察)

松阪城

黒漆 (67)



木口面



柾目面

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume



板目面

赤漆 (A)



木口面



柾目面

ブナ属 *Fagus* L.



板目面

赤漆 (B)

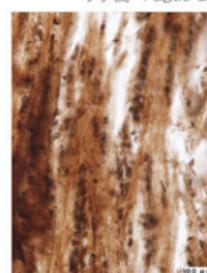


木口面



柾目面

ブナ属 *Fagus* L.



板目面

木材組織顕微鏡写真

久居城下町遺跡（第9次）・東鷹跡古墳

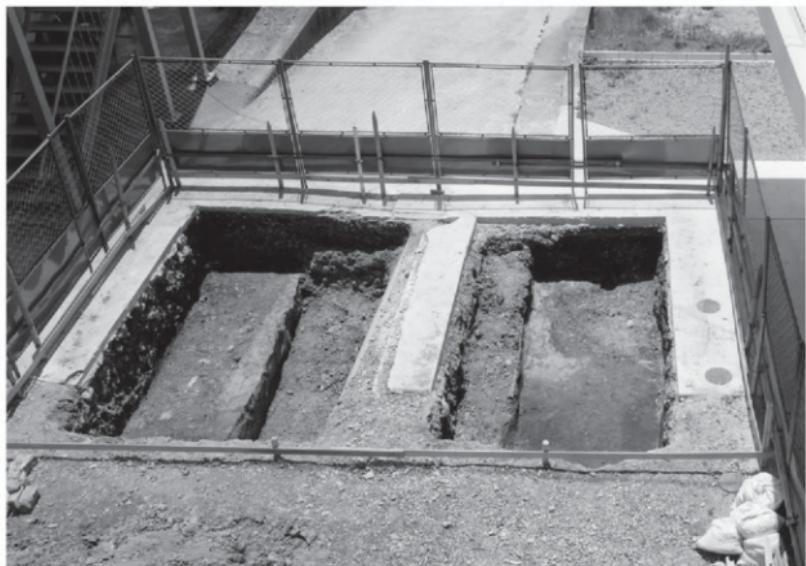


調査前状況（北東から）



v - vi断面（北西から）

久居城下町遺跡（第9次）・東鷹跡古墳



遺構掘削前全景（北東から）



遺構掘削後全景（北東から）

報 告 書 抄 錄

三重県埋蔵文化財調査報告 321

松阪城跡、久居城下町遺跡（第9次）・東鷹跡古墳発掘調査報告

2010（平成22）年9月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社 アイブレーン
